
俺out現実→俺in異世界 I F 世界

青山 衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺out現実↓俺in異世界 IF世界

【Nコード】

N1069M

【作者名】

青山 衛

【あらすじ】

俺out現実↓俺in異世界の外伝。

主人公は変わらずの小原良也。

確実に前作を見ないと分からない！読んでない方は戻るキー連打でよろしく願います。

真剣でプロローグ（前書き）

という訳で無茶にもほどがある外伝投稿。

いやまじこいの反響が大きくて…。

とりあえず、既出臭いが本編どうぞ。

真剣でプロローグ

「うえ…ひつく…」

少女は一人道を歩く。

辺りに親の影はなく、やつれた顔と、無数の打撲痕。

誰も彼女に声はかけない。

少女の望みは母に好かれる事。大多数の人間は母に、父に愛を受けながら育つ。

しかし、彼女は例外だった。

続く暴力。

続く虐待。

安息たる家は、彼女の心をすり減らすだけの存在。

このままでは少女は自分の心が壊れる。

幼心にそう感じた。だからこそ彼女は友達が欲しかった。

いつも彼女が遠目に見て焦がれていた子供達の集まり。

皆楽しそうでいつも混ざりたいと思っていた。

ある日勇気を振り絞り、声をかけた。大好きなマシユマロを握りしめて。

しかし、すげなく断られる。

その後2、3日同じように頼みにいった。

少年は、今の仲間に満足していた。

少年に悪気はなかった。しかし、それが決定的に彼女の何かを失わせた。

フラフラ

フラフラ

フラフラ

生気の失せた顔でフラフラ歩く少女。

片手にはあげるはずだったマシユマロ。

救われる者と救われない者の人格に差はない。

差があるとすれば…運くらいなものなのだろう。

そして、この少女にも運が向いた。

「ウホッ！いい幼女！……いや今俺はシヨタだからもーまんたい！」

少女と同じくらいの少年が唐突に不穏な事を口走るが、少女には意味が分からなかったのが救いか。

「…………君は一人？」

少年は少女の顔や体を見て、真剣な顔をする。

「…………うん」

少女は、生気のない顔で頷く。

「なら、一緒に遊ぼう？」

少年は手を差し伸べた。

「……………」

少女は沈黙する。唐突に訪れた笑顔に。

「……………」

少年は手を差し伸べたまま、ニコニコ笑う。

少女も手を伸ばした。

縫るように、夢見たモノを追いかけるように。

そつと少年の手を握る少女。

「うん！んじゃなにしようか？」

少年の笑顔に、少女は涙した。

「うほう！？何故泣く幼女！」

少年は慌てふためく。

「ううん……嬉しいの……」

「……そっか」

少年は笑顔を深める。

「これ……あげる」

少女が手渡したのは、少女に握りしめられ形が変わってしまったマシュマロ。

少年は、それを受け取り、ヒョイツと『半分』食べた。

「はい、後半分は君の分」

少年から半分以上のマシュマロを受け取り、少女は泣きながら食べる。

「おいしい?」

「うん……おいしい」

「おけ、んじゃこれで友達だ。何をしよう?」

そこで少女の顔に笑顔が灯った。

「僕、鬼ごっこがしたい!」

「ふははは! 俺に鬼ごっこを挑むとは片腹痛し! ずっと俺のターン
!」

外史の扉が開かれた。

真剣でプロローグ（後書き）

この外伝は、気が向いたら投稿なんで恐らく更新ペースは牛歩。

山なし意味なしオチなし。完全に自己満。

まあたまーにご確認くださいさると幸いです。

真剣で始まり（前書き）

まあ…とりあえずここまでは投稿。後はいつになるやら。

ぶっちゃけ勢いで書いています。原作再プレイもしてませんので、かなり怪しい所が多々。

ご指摘待っています。

あととりあえず、時間がもの凄い勢いで飛びます。
キングクリムゾンです。

その他諸々、気にしない方だけどうぞお進みくださいな。

真剣で始まり

何故だ…

何故だ…

何故だ…

（なんで俺はまた赤子ー！！！！！！）

吾が輩は赤子である。

（良也さん…実は…）

さっき聞いた神様（笑）の声が頭に響く。

（間違っちゃったす。テヘ☆）

（テヘ☆じゃねえよ。お前ぬっころす。ちょっと降臨しろ）

（へへーん！まだ良也さんは立つこともできないっす！）

「バブウ！」

仁王立ち赤子。

（立ったっす!?!）

「あなた!?! 良也が立ったわ! それも唐突に!」

「ホントだ!?! きっと素晴らしい子に育つに違いないなおまえ!」

めちやくちや呑気な両親。小原夫婦。

そして俺は良也。

つまり奇しくも俺は、小原良也として転生することと相成ったのだ。

さて、まあ自己紹介から始めよう。

俺は小原良也。

神様にぬところされ

チートをもらい

三国志の時代に転生

三国志の時代で死亡

再び神様の要望に応え次世界

新しい世界へ↑いまここ

というわけだ。

俺のチートは『存在最強』。

その世界に存在する全ての存在より1.5倍ほど強い。みたいな?

まあそんな感じ。

んで、くっすとか言ってるスカポントンが神様（笑）。

俺をぬっころし、神様の都合で俺に転生ライフをむりくり送らせている張本人。 蓼花 唯。

基本空気なので気にしなくていい。

まあ気にしてもしようがないので、赤子ライフを謳歌する。

むーん。頭が大きくて動きにくいだが、動けなくはない。

「あなた！良也が立った上に歩いたわ！ハイハイすらぶっ飛ばして」

「そうだな！恐らくギネスに乗るくらい早いなおまえ！」

ああ…忘れてた。大人しくせねば…。

ストーンと座りだああ言う。

とりあえず…

（おい、神様（という名の虫））

（ぐお…酷いっす。ちよっと間違っただけじゃないっすか…）

（どんだけ間違っただよ）

（いやぁ…間違っつて転生、さらに世界も間違っちゃったっす）

いやね…どんだけバカなのコイツ…。

（バカとは酷いっす！（）がついてなくても聞こえるっす）

（いやメタ禁止。つか前もやったよ、それ）

のんびりしながら唯と話す。

（まあやっちゃったもんはしょうがないっす。頑張ってくださいっす）

（ちよっ！？おまつ！！）

（またコンタクトするっす。それじゃあまたっす！）

プツンと切れる精神的な繋がり。

はぁ…しょうがない。

とりあえず赤子ライフをエンジョイしよう。

まあやることないけど。

というわけで、月日は流れる。

近くの学校に通いつつ、平凡……。まあ成績やらなんやらは完璧。
まあ元大学生……。まあ百年くらい前だけどね！！

それでも考え方や知識の幅はムチャクチャあると自負している。

まあそれなりに楽しくやっている。

ある日。フラフラとしている幼女を拾った。
いや、言い方悪いな。……。保護した？

まあなんでもいいや。

とりあえず道をフラフラしてた上に、虚ろな目、体に打撲痕。これはマズいと話しかけた。

友達になり、上手い具合に家に連れてきて……誘拐じゃないよ？
んで飯をたらふく食わせて、両親に話をした。

両親は少女の状態に憤り、もっそい勢いで児童相談所に駆け込んだ。

ここの児童相談所は凄まじくアグレッシブだった。某児童相談所に見習わせたい。

訪問↓確保↓通報。

素晴らしい手際だった。

なんか川神って家がやってる児童相談所だったらしい。
ありがとう。

んで、幼女は保護され、川神院って所に預けられるハズだったが……
が、何故かウチの両親がここぞとばかりに養子に！と名乗りを上げた。

「だって可愛いんだもん」

「可愛いは正義」

うむ、我が両親に選ばれる人は、突飛な人が多い。

まあそんな両親の元ですくすく育つ少女。あと俺。

名前は小雪。名前の通りの白い髪と白い肌。

お人形さんみたいな容姿の彼女。

「あーちようちよー♪」

「ちよっ！？ユキ！！そこ川！！」

ジャボーン。

あまりに呑気な両親に育てられたせいかな、もっそい呑気……って言うかアホの子にすすく育っていった。

ユキは常にニコニコしている。

理由を聞いたら

「笑ってたら殴られるのが少ないから」

泣けた。もう少しお小遣いをはたいて、マシユマロをありったけ買ってやった。

「ぎぼぢわるい…」

あまりに買いすぎてユキが吐きそうになってた。

ユキは学校でいじめられていた。

奇しくも同じ学校の隣のクラス。

まあここいらのガキは全員この学校だしなあ。

なんで、とりあえず平和的にシメてみた。

顔を隠し片っ端から闇討ちして、「ユキをイジメたら不幸になる」と耳元で囁き、離脱。

まあ平和的。

すぐにイジメはなくなった。

しかし、ユキには友達は出来なかった。

ユキが拒絶したのだ。

「別に良也とお母さんとお父さんだけいればいいや」

勿論説得した。

「ぶー！。良也が言うなら友達作る……あ！消防車！赤いよ！」

「そうだね。赤いね」

もうのんびり加減が天元突破。

まあしばらくすると、何人か話す人ができたようで、一安心した。

俺は俺で体が出来上がってきた中学後半に自分の体の調子確かめ始めた。

体力的にも、氣力的にも、前にいた世界より調子がいい。
恐らくこの世界の存在最強が前の世界よりも強いのだろう。

氣については、前世の妻のうちの一人に習い、習得した。

体の感覚として覚えてはいないが、知識でイメージを固め再び氣を
習得できた。なんか前より大分良くなってる気がする…。

まああんまり使う事がなさそうなので特に気にしていないが。

前世とは違い、時代は現代。

パソコンもあれば、もちろん電気も普及している。

井戸から水を汲まなくても水出るんだぜ!?

飢饉とかないし、夜盗とかいないんだぜ!?

つまり超平和。

俺の中でとんでもなくセンセーショナルだった。

慣れって怖いね。

力自体もバカみたいに強く、キレも増している。

前世での俺のファイトスタイルは格闘。格ゲーを元にした実践的な
ファイトスタイル。

最初は前世での体の動きに頭はついていても、体が違う為、難儀したが数年の地道な特訓の末、前世と遜色ないくらいに動けるようになった。

むしろ調子がいい。

更に月日が経ち、俺達は川神学園という学校に入った。

文武両道を支持する変な学校。

特に決闘制度やらマジで訳分からん制度がある。

まあ俺みたいに可もなく不可もなく生きる者にとっちゃ関係ないが。

クラスはSからFまで、ある意味ランク訳されている。

Sは優等生がはいる、まあある意味変人の集まり。

Fは劣等生が多い、まあある意味変人の集まり。

変人ばっかだな。

かく言う俺はBクラス。何故かユキも同じクラス。普通家族は別にするもんじゃねえの？

まあ学園側の考えなんか分かるはずもなく、穏やかに毎日を過ごす。

更に時間は流れ一年生も終盤。

「おーい、小原兄妹」

「ん？なんだ、山田」

「なんだー！山田！」

「山田じゃねえよ！柏木だよ！何回目だよ！」

数えきれない。

これは山田。またの名を柏木信二。入学してから何回席替えしても俺の隣に陣取るストーカーだ。

特記事項はツツコミが上手い事。あとはノリツツコミもできる。更に二段ツツコミも…。

「なんかバカにされた気がする…」

「気のせいだ」

「気のせいだー♪」

「んで？なに用だ？俺はこれから早く帰って必殺サラリーマンの再放送を見ねばならないのだが」

「いや、あれは確かにシニールで面白いが…って違う！」

ちなみに決め台詞は『24時間戦えます』だ。

「なんか学園長が二人を呼んでるって、先生が伝えてくれって」

「学園長が？」

この川神学園を統治する学園長。川神鉄心。

なんか松笠の橘平蔵という化け物とかタメを張れるぜー。とか噂されている人。

まあそもそも橘平蔵って誰だよって話。

最近気づいたが、やはりここも何かしらのゲームとかの世界なんだろう。

氣とか普通にあるし。前にとある先輩が放ってるのを見た。

しかし、聞く情報に覚えがない。未プレイなのだろう。

まあなんで最近になって気がついたかというところ、ユキの世話やらでゆっくり考える隙がなかったからだ。

まあ分かったとしてもぶっちゃけこの平和を乱す事はしないがな。

「まあ：行ってみようか。ユキ、行こう」

「おー♪」

「お前らホントに仲いいな…」

山田の見送りを受け、教師を後にする。

学園長室までの廊下を歩きながら

「ユキ、なんか悪い事した？」

「んー。さっきこぼした牛乳を雑巾で吹いて放置してきた」

なんて悪辣！

恐らく明日の朝にはバイオ兵器が爆誕しているだろう。

まあ…いいか。

そも俺は、大抵ユキと行動を共にしている。

お互いに後ろ暗い所はない。

勉強も出席も優秀なはず。

一番最近のテストではかなり上位を勝ち取った。ユキも上位。

まあ…元大学生が普通に授業受けてりゃそら行くわな。

ユキに関しては何故か頭がいい。何故か、としか言えないが。

まあしょっちゅう家で勉強みてるからかな

とかなんとか思っているウチに学園長室前。

コンコンッ

「入ってよいぞ」

「失礼します」

「失礼しまーす」

学園長室は、畳張りでまさに和。つか茶道部の部屋みたい。

「小原兄妹参りました」

「うむ、楽にせい」

「わーい♪たたみー」

グデーっと横になり畳を満喫するユキ。

まあいいか。

「うむ、この様子を見るにあの時のトラウマはないようじゃな」

ユキを優しい目で見る学長。

そうなのだ。この川神鉄心。あの児童相談所の所長なのである。んで川神院の師範。更に川神学園の学園長。

もうわけわかめ。

んでもやっぱりユキを救ってくれた人なので感謝しまくり。

「それで話とは？」

だらけるユキを横目に話を促す。

「うむ、そうじゃった。実は成績の事でな」

成績？ユキも俺も悪くないと思うんだけど…。

「いや、悪くて呼び出した訳ではない」

「その心は」

「二年に進級した時にS組に入らんかとな」

うわぁー。

「いえ、俺は遠慮します」

「じゃあ僕もー」

「ふむ、まあ分かりきってはあったがのう…」

俺とユキはテストの度にS組への誘いを受けている。んで毎回断っている。

だってめんどいし。

ユキは俺と離れたがらないし。

「まあ自主性を重んじておるからのう。否と言われればそれまでじ

やからな」

学長はため息一つ。

「ならば良也。川神院に入る気はないかの？」

その言葉にビクツとするがすぐに平静を装い。

「いえ、自分は一般市民なので…」

そう答えると、学長は細い目を開き、俺を計るように見る。

「ふおっふおっふお。何、隠すな。いくら上手く氣を封じていても、
儂の目はごまかせん。中々よい資質があるじゃろう？」

「いえいえ、パンピーもパンピー、ドパンピーな俺にはなんの事か
…」

まあここまで言われて白々しいが、俺はすっとぼけ続ける。

「まあよい。力ある者は力ある者に引かれる。それが摂理じゃ」

笑いながらいう学長。

「しかし、お主を見ると儂の血もたぎる…もしかしたら良也。お主
は…」

「学長、話は終わりですか？」

話がマズい方向に向きだしたので慌てて切る。

「む？うむ。終わりじゃ」

「そんなら失礼しますね。ユキ、行くぞー」

「うえーい」

いや普通に喋れ。だらけきって溶けてるぞ？

「失礼しました」

「失礼しましたー」

扉を閉める時に

「良也、お主はもしかしたら誰よりも強いのかもしれんな…」

そんな言葉が聞こえてきた。

が

無視した。

俺の平和は誰にも邪魔させんぞー。

願わくば平和な日々を。

俺達は春休みを終えたら二年生になる。

それは始まり、それは序章。

波乱の幕開けが、近い。

真剣で始まり（後書き）

まあそういうわけで、小雪ちゃんは小原小雪。
基本的に性格は変わらず。

オリキャラ

柏木信二

ツツコミ。

以上。

とまあギャグオンリーのシナリオほとんどなしなので、期待しないでください。

真剣で春休み（前書き）

やってまいりました。

さてはて、とりあえず春休み。

ユキに続く二番手は彼女達。というか彼女達のルートがあって欲しかったなあ。って感じ。

真剣で春休み

i n t h e 春休み。

場所は街外れの原っぱ。周りに人はいない。まあ街から大分離れて
いるからなあ。

「シツシツ！」

ヒュッ、ボッボッ！

相も変わらず体を動かし春休みの暇な時間を潰す俺。

「むんっ！」

シュッ！

ユキも一緒に武術。

ユキとは昔から一緒に遊んでいた。

俺の大人気ない鬼ごっこや、かくれんぼでユキの身体能力はメキメ
キ上がっていった。まあ常人の範囲内だが。

武術に興じる俺を真似し始め、今やなんちゃってテコンドーを使い
こなす。

両親は道場に行ったら？とか言っていたが、ユキは拒否。俺に習うと言って聞かなかった。

なので俺がなんちゃってシリーズを教えること数年。

ユキはそこらのナンパ共を秒殺できるくらい強くなった。

まあお兄さん（歳は同じだが、若干俺の方が早い）としては危ないか、妹が変な男に捕まらないと一安心。

「良也、お腹すいたよー」

「ん？おお、もう昼か」

腕時計を確認して驚く。意外に集中していたようだ。

「んじゃ早く帰って飯にするか」

「わーい♪」

タオルやらの荷物を纏め、原っぱを後にする。

俺達が住む川神市。

商店街なんかがあり、穏やかな街だ。

まあ少し行ったら歓楽街やらある所もあるが、そっちに行かなけれ

ば本当に平和な街。

ゆっくり街並みを見ながら歩く。

「あ、そうだ。ユキ何がたべ……あれ？」

ユキいねえし。

周りを見回す。

あ。いた……けどなんか持ってる…。

「良也ー良也ー！ほら、ドナル！」

「だあー！そのシマシマピエロは返して来なさい！！」

ユキはMの看板で有名な彼を持ってきた。

あの笑顔とサムズアップが印象的な彼だ。

「えー。じゃあカーネ……」

「うおー！そのナイスミドルも置いてきなさい！」

どこから持ってくるんだよ…。

「はい」

基本的に素直な子なんだが、突飛な行動が多い。

あの人形って普通はちゃんと固定されてるんだけどなあ。

疑問はつきないが、とりあえず家に帰る事にした。

「ただいま」

「ただいまー」

家に上がるが、人の気配がしない。

「父さん？母さん？…あれ？いないのか…？」

リビングにも二階にもいない。

ふとリビングのテーブルの上に手紙があるのを発見。

ん？何々…。

『旅行が当たったので、行ってきます　父』

「そうかそうか…。ってなんでじゃー！！」

ベシンと手紙を叩きつける。

「おぉーノリツツコミ」

いや拍手いらないよユキ君。

父はなんか有名な彫刻家、母はなんか有名な画家。

二人とも基本いつも家にいるが、偶に道具を持ってふらっと出て行っ
っては、札束を抱えて帰ってくる。

いや、なにやってんだよ二人共。

マネージャーもいるらしく、敏腕らしいが姿を見た事はない。なん
でも忍なのだとか。

まあ細かいことを気にし出したらキリがないので華麗にスルーした。

「んでどこに旅行だよ…」

手紙を裏返すと、

『地球五周ツアー行ってくるね！お土産は奈良漬け買ってくるね！
母』

「どん！だけ！回るんじゃー！！」

五周もしたら全国制覇できるんじゃないか！？

「おぉー奈良漬け！」

いやユキ、そこはキラキラ目を輝かせる所じゃないから。
近くのスーパーでも買えるから。

「はあ…まあしょうがないか…」

恐らくは年単位で帰ってこないだろう…。まあ日本によったら帰ってくるかもだが。

流石に生活費くらいは入金してくれるだろう。

……いやいくら呑気な両親とはいえ、さすがに忘れてたりしないよな？

……ありえる。

最悪、バイトしなきゃなあ。

今のうちに少し探しておこう…。

「良也ーお腹空いたよー」

ゴロゴロと床を転がり回るユキ。

「ユキ、ゴミだらけになるぞ。今つくるから待ってけ」

「うえーい…」

そう言うユキはソファでグッタリする。

ちゃきちゃき簡単に作り昼食。

「いただきます」

「いただきますーす♪」

二人そろってモクモク食べる。

その途中に

「そだ、ユキ。母さんがしばらくいないみたいだし、家事の分担し
ようか」

「ムグムグ……（グツ）」

ユキはモグモグしながら親指を立てる。

うむ、物を食べながら喋らないをちゃんと実装してるな。

「まずは…炊事は俺な。んで…洗濯も俺。掃除も俺…」

次々に分担が決まる。

「…最後に花の水やりも俺…よし。決定」

「ムグムグ……（ゴクン）けってーい！」

要するに全部俺。

まあ別に大した労力じゃないからな。

ユキも手伝いしてくれるし。ちゃんと言えばちゃんとやるし。

休み中はまだいいけど、学校が始まったら大変かな…。誰かお手伝いさんがいればなあ…。

まあ無い物ねだりか…。

キリキリやるかあ。

とりあえず食器を片付け始めるのだった。

家事をしているうちに時間は過ぎる。

p i r r r r r

ん？俺の携帯か。

ピッ

「俺だ」

「スイス銀行に二億。すぐにだ」

「断る」

ピッ

「ん？誰だったのー？」

「いや間違い電話」

ユキにそう答え、TVを目を向ける。

p i r r r r r

「俺だ」

「ちょっとしたジョークじゃなかよ！」

「ん？誰だ？」

「いやいや、柏木だよ！分かれよ！つか液晶に書いてあるだろ！」

ああ、この三段ツツコミ。たしかに山田だ。

「いや、山田って出てた」

「携帯の登録まで山田なのか……。まあいいや。それよりさ、良也、格闘技とか興味ないか？」

格闘技と聞いて、少し反応してしまったが様子を見よう。

「まあ、人並みに興味はあるよ。それが？」

「それがさ、歓楽街を抜けた先の工業地帯あるだろ？」

歓楽街の奥……

そら聞いた事あるに決まってる。夜の歓楽街は治安がかなりヤバいということも、その先の工業地帯付近は不良やらヤーさんの溜まり場ということも、普通に人と話していたら手に入る噂。

「その工業地帯で、ルール無用のリアルファイトやってるらしいんだよねえ」

「そーなのかー」

「安○先生、見に……行きたいです……」

安○先生じゃねえし。

「勝手に行ってこい」

「いやさ、一人じゃ寂しいじゃん？」

「いや、ビビってるだけだろ」

「そそそそんなことねえよ」

「じゃあ逝ってこい」

「ごめんなさい、怖いです…。他の奴らもビビってさ、誰も付き合
つてくれないんだよね」

「行かなきゃいいじゃん…」

「いやさ、怖いものみたさ？頼むよ、好きなもん奢ってやるからさ
！」

ピクン、それは旨い話だ。まあヤバかったら逃げればいいしな。

「ほほう、ならばいいだろう」

「よし！決まり！五時に歓楽街の入り口に待ち合わせな！」

ピッ

「良也、どっか行くの？」

「うん、山田と遊びにいつてくるから、戸締まりだけちゃんとして
おいてくれ」

「山田か…じゃあいいや。いつてら〜」

グデグデとしながら返事するユキ。

「晩飯は用意しとくから温めて食べよー」

「うえーい…」

さて、時間的には晩飯作って丁度くらいだな。

さっさと始めよう。

ユキと必殺サラリーマン見てたら遅刻した。

「悪い遅れた」

「遅れて許されるのは女だけだぞ！」

「まあ怒るな。ほら奈良漬け」

「なんで奈良漬け!？」

いやスーパーで買った。

「まあいいや、早く行こうぜ」

奈良漬けをしまい歓楽街に足に向ける山田。

その後にテクテクついていく。

歓楽街はまだ時間的に早いので、一般人ばかり。

ヤバイのは深夜らしいからな。

歓楽街を突っ切り、辺りは薄暗くなってきた。

工業地帯は明かりも少なく、何気に気味が悪い。

「うーん、確かこっちって情報があるんだけど…」

「しっかりしろ山田」

「山田じゃねえって…。いい加減覚えてくれ…」

キョロキョロしながら歩いていく。

「お！あそこっぽいな」

山田が指差した先は仄かにライトアップされていた。

近づいていくと、全容が分かりだす。

廃工場だろうか、屋根は抜け落ち辺りには柄の悪そうな男や、頭の悪そうな女がたむろしている。

「うつわくやっぱヤバいかな…」

「引き返すか？」

「なんでお前はそんなに平気そうなんだよ…」

いや、別に剣とか槍とか装備してないし。まあナイフくらい持つてるかもしれないが。

「せっかくここまできたんだからな！俺は行くぜ！」

「逝ってらっしゃい」

「ちょ…。ごめんなさいついてきてください…」

弱い山田。

まあ見るだけだな。

二人で廃工場に入る。

中は乱雑に鉄パイプやらなんやらが散乱し、お世辞にも綺麗とは言えない。

そして真ん中にはドデカイ穴が開いている。地盤沈下か？

「へえ…あそこがリング代わりなのか…」

ああ、なるほど。

すでに観客は結構いる。

まあメインイベントなのだろう。

片隅に陣取りしばらく待っていると、不意に拡張機を通した声が辺りに響く。

『れでいーすえーんじえるとるめん！今夜もご機嫌な……』

ああ…もの凄い頭悪そう…。

聞いてられないので、声から意識をそらす。

辺りには不良ばかり、頭がピンクやら青やら赤やら…。ヴィジュアル系だなあ。

中には黒髪の奴や、スーツ姿の中年もいるが、どこかラリってる感じがする。

どうやらやっぱりろくでもない集まりのようだ。

開始五秒で帰りたくなったが、何故かノリノリなアホがいるので帰るに帰れない。

司会の頭の悪そうな演説も終わり、戦いが始まる。

東として紹介されたのは板垣 竜兵とかいってたかな。

かなり強面な顔。

対するのはハンサムなんとか。ハンサムだけど強そうにはみえない。

まあぶっちゃけ開始数撃で終了。

つまんね。

のへーっと興味なく見守る。どれもこれも普通の人だ。

目の前で起こっているのは、ただの喧嘩。

本当の殺し合いはこんな生ぬるい物じゃない。

木刀やナイフなんか飛びだしているが、所詮は玩具。本当の凶器
ってのは方天画戟や金剛爆斧の事を言うんだ。

俺が昔相対した敵の足元どころか毛にも及ばない。

まあそうそうそんな化け物がいても、いやだけどさ。

しかし山田は楽しそう。

一撃入る度に顔をしかめ、勝負が決まったら歓喜を上げる。

まあ戦うという事は人間の本能を呼び覚ますのだろう。雄なら尚更だ。

次々に戦いが組まれていく。

中にはユキより身長が低い女の子や、棒術みたいなものを使うサディスティックなお姉様もいた。

女の子が男より強いって…なんか身近だわ。

少し昔を思い出した。

そしてバトルも最終。

司会に呼び出されたのはチャンピオン・板垣辰子。

へー女性がチャンピオンなんだ。

まさにボンキュッボンなお姉様。ポケットとした表情が似合うチャーマニングさだ。

相手は…なんだっけ？名前聞いてなかった。

しかし、今までの輩とは全然違う。

「あらら、彼意外に強いねえ」

「は？なんで分かるんだ？」

俺の呟きに山田が尋ねる。

「いや、なんとなく」

口が滑った。

「ふうーん。まあ確かに強そうだけど」

そう言って山田はリングを注視する。

あの男、ちゃんとした構え、それにあの目。明らかに場数を踏んでる。

一方あのお姉様からは、闘志はおろか、構えすら見られない。

どういことだろう？

俺が疑問に思っているうちに試合のゴングになる。

「ホオオオ！アチヨウ！」

男はギャグとしか思えないかけ声に似合わない鋭い蹴りを放つ。

だが…

ガシッ

蹴りが女性に掴み取られる。

おほう。なんだやっぱり強い……

ゾクッ

女性の雰囲気が変わる。

「あああああああ！！！」

ブオンッ！

女性は、足を掴んだまま腕を振り回す。

男は人形のように振り回され…

ドゴオン！

鉄板がしかれたリングに叩きつけられる。

すげえパワー。

男はピクリともいわない。

しかし、

「ああああああ!!」

ボキッ

女性の追撃は止まない。

足を、腕を、肋を。
折る。

ストンピングの嵐。

恐らく男は格闘家として再起は不可能。

うおう……。この現代で本気でビビる殺意を経験するとは……。やっぱ
りいる所にはいるんだな。

武人が。

まあ学園にも何名もいるが。

「おい……ちょっとあれヤバくね?」

「まあ誰か止めるだろ…ほれ」

さっき戦ってたサデイスティックなお姉様が一声かけると、女性
は止まる。

「うわ…う…ごめん吐きそう…」

恐らく男を直視したんだな。

あれは酷いなあ。

「ほれ、水」

「……………悪い」

背中をさすり、さっき買ったミネラルウォーターを差し出す。

しかし、あたりは凄まじいボルテージに包まれている。

まあ多分だからそのチャンピオンなんだろうけど。

『さあ！飛び入りでチャンピオンに挑む奴はいないか！！』

司会がそう言うが、辺りは誰も動かない。

まあいいだろう。

「山田、終わりらしいから帰るぞ。全く、世話かけて…」

「う……山田じゃねえ……。すまん……奢り頑張る」

頑張れ。

山田に肩を貸し、工場を後にしようとした。

それが悪かった。

「ちょっとアンタ」

サデイスティックな声が俺を呼び止める。

恐らく誰もが息をするのも潜めた中を余裕で動いたからか。

うわぁ……振り向きたくねえ……。

「ちょっと友人が体調悪くてー、急いで帰らなきゃ……」

「無理ね。辰がまだ食い足りないの。丁度いいから食われなさい」

バシンとSMで使うような鞭が鳴らされる。

マツチヨ男が山田を引き取る。

あー山田ー！

「さて、じゃあ山田をよろしく」

スタスタと歩き去る。

ありがとう山田。君を忘れない。

「馬鹿言わないで」

ヒュンッ

しなり、俺の頬を打とうとする鞭。

ヒョイと避ける。

「!?!?…どうやら少しは食い応えがありそうね」

「スキのねえ強そうな野郎じゃねえか…俺に任せてくれよ」

さっきの竜兵とかいった男が近づいてきて舌なめずりする。

ヤバイ…絶対にお関わりになりたくない人種。

うーん…ノすのは簡単だが、山田がなあ。

マッチョに捕まる山田は、顔を真っ青にしている。

「山田。顔がブルーだな。あの日か?」

「山田じゃねえよ！あの日でもねえよ！ていうか緊張感だせよ！」

三段ツツコミ。結構なお手前で。

「この素晴らしいツツコミ技術に免じてそいつ離してくれない？」

「何言ってるのよ。人質よ」

即答される。

「山田、悪い。君は忘れない」

歩き去る。

「ちょ！？良也！？」

「チッ。やりにくい坊やね。いいわ、指一本貰うわ。やれ」

マッチョに命令するサドお姉様。

マッチョは山田の小指を握りしめる。

やっぱりこいつらヤベえ奴らじゃん…。できれば関わりたくはなかったが…仕方ない。

トンッ

ドスンッ

マッチョが倒れる。

「へ…?」

山田が情けない声を出す。

「ちよい!」

ドスッ

「ぐふう…」

山田をやっつける。

これで完全犯罪。

「アナタ何をしたの…?」

警戒心バリバリなサドお姉様。

「くそ!! 誰にやられた山田!」
山田をガクガク揺さぶる。

ブチッ

「……そうナメられているのね……。辰！」

「はいはい」

ポケットとしたチャンピオンがやってくる。

「殺しなさい」

ギンツ！

ポケットとしたチャンピオンが、ポケットとしてないチャンピオンになる。

俺、お荷物がいるんだけど…。

山田……。捨てていいかな？

「ああああああ！！」

ボツ！！

チャンピオンの一撃を片手でいなす。

「……よっと」

山田を左肩に担ぎ上げる。

さて……眠って貰った方が早そうだなあ。

「オオオオオオオオ！」

両手を合わせ、振りかぶり、打ち落とす女性。

「……シッ！」

ガンッ！

蹴りで受け止め、弾き返す。

くっく……すげえ力……。

片腕でやってたら、弾き返すなんてできなかったな……。

「ぐっ！」

ガシッ

チャンピオンが掴んだのは……

「バス停かよ……」

あの下部分がコンクリで固めてある奴。あれだ。

「精々死なない部分で受けなさい。殺しはしないわ……多分ね」

ニタリと笑うサドお姉様。

「がっあああああ！！」

「くっ！？」

ガコオオオン！！

ヤバイ…何がヤバいかつていうと色々ヤバイ。

バス停は、床の鉄板を歪めちよつとしたクレーターを作った。

いやいやいや…

軽々とバス停を振り回す女性なんて……ああ、意外といったわ。

記憶を遡ると意外に思い当たる人が何人か。

バス停の重量の倍もあるだろう斧を振り回す人もいたし。

「があああああ！！」

ブオンツ！

横風ぎに払われるバス停を、身を屈め避ける。

あの怪力とバス停の重量、軽くトンを越える衝撃になるだろう。

いくら存在最強の身体能力があってもなんの備えもなしに正面からぶつかれば、間違いなく耐久力負けする。
つまり骨がぼっくり粉碎骨折。

仕方ない…

普段はなるべく封じ込めてる氣を解放する。

「ウアアアアア！！」

ビュオンッ！

少しばかり脚に氣を溜めて、振り抜く。

ドバキヤッ！！

派手な音を立てて、バス停を粉碎する。

俺が習った氣は二種類。

外氣功と内氣功。

外氣功は、氣を練り、体外に打ち出す。分かりやすいのは波DO拳。他には爆発させたりと指向性を持たせる事も可能。

そして内氣功。

今使ったのがそれだ。

氣を体の中で循環させ、身体能力をUPさせたりや体を硬化させたりできる。

以上説明的補足。

チャンピオンが体制が崩す、そこに

「フッ！」

踏み込み、鳩尾に右肘を入れる。

「かふっ…」

ドサッ

しばらくマトモに息は出来ないだろう。

「そんな…辰が…」

「負けた!?!」

あたりは哑然としている。

チャンス!!!

「アディオス!」

超速で走り出す。

俺らが走り去った後、廃工場には静寂が満ちていたそうなの。

「…ふう…ここまできたら大丈夫か」

歓楽街を過ぎ、河川敷までやってくる。

「おい、山田。やまあだ、起きれ」

ぺちぺちと頬を叩く。

「……………んっ…あれ？ここは…」

「寝たら死ぬぞー！山田！」
ベシベシベシ

「ちょ…やめ…起きて…る」

「なんだ、起きてたのか。大丈夫か？」

「いや頬は痛いけど、なんとか…。あれ？なんで河川敷にいるんだ？」

「いや、アイツらに捕まったじゃん。お前殴られて気絶したんだよ。んでなんか警察来て…」

簡単に嘘八百を教える。

「…でここまで担いで逃げてきたんだよ」

「…ごめん。マジで迷惑かけた…」

シュンとする山田。

「別にいいよ。そのかわり、奢り覚悟しとけよ」

「おう、任せろ！」

山田は笑い立ち上がる。

さて、早く帰ってユキの様子を見なきゃなあ。

それぞれ帰宅の路を行くのだった。

この日から、廃工場のイベントはしばらく開催しなくなった。

謎の男にチャンピオンがやられたという噂と、その男を板垣四姉弟が探しているという噂が裏の人間に蔓延した。

そんなのをまったく知らない俺。

未だに平和？

後日

「おかわりー♪」

「俺はステーキ追加」

「…………うう…………」

ガツガツ食う俺とユキ。
泣く山田。

「泣くな、山田」

「泣くなー」

「…だって春にバイトした分が…ドンドン食い散らかされていくんだもん…」

男がもん言うな。

「まあしょうがねえよ。好きなだけっていったし」

「ムグムグムグ……………」

「いやお前は覚悟してたけど、小雪さんがこんなに食うとは…」

まあユキは甘い物すげえ食うからな。

ファミレスと聞いてくつついてきたユキに、山田は無謀にもユキの分も持つといいだした。

それが運命の分かれ道だったな。

しばらく俺達の食べる音と、山田のすすり泣きが響いていた。

「御馳走様」

「ごちそうさまー」

「……はいお粗末様…」

ガツクリとしている山田。

伝票は…18000円也。

まあ迷惑料にしちゃ高いかな…

「ユキ、行こうか」

「うん！」

「おーいおいおい…」

「山田」

「ぐすっ…なんだよ柏木だよ」

「ほれ」

一万出して颯爽と去る。

「うお……オロローン！良也く心の友よ！！」

抱きついてくる山田を牽制しながら

「うっせ、いいから早く払っとけ。

俺ら帰るからな」。また新学年でな」

「またな山田ー！」

「おう！またな！」

山田と別れ、家に帰る。

まあユキが食った分位は払わなきゃな。

つかファミレスのパフェとかって異常に高いよなあ…。
手痛い出費だ。

春休みが終わる。

真剣で春休み（後書き）

多分この作品はサブキャラをメインに展開する予感。

そして叩き折られるリュウゼツランルート。

次回であっさり叩き折ります。

個人的にリュウゼツランルートはユキありきな感じがしたので…。

まあ見切り発車した作者が悪いんですが。

真剣で新学年（前書き）

まあとりあえずテキストにリュウゼツランルートを叩き折ってみる
テスト。

あまりにテキストすぎたか…？

真剣で新学年

晴れて新学期の朝。

今日も早よから起き出して、TVをつけながら朝飯を作る。

『昨日、川神市の葵総合病院の院長、葵……氏と副院長の井上……氏が、不正に……』

ん？

川神市？

近場の話題だ。

そう気づき、ボリュームを上げる。

『近々院長を変え、再起に乗り出す方針に……』

ほーあの院長変わるのかー。

そういや、あの院長の息子がS組にいたっけ。

たしか葵 冬馬。

常にテストトップな秀才。

何かと大変だろうなあ。

「ふわー……おはよー」

そこでユキが起き出してくる。

「ユキ、おはようさん。ちゃっちゃと朝飯にしよう、ほら顔洗ってこい」

「うん……」

あつちにフラフラこっちにフラフラ。

相変わらず危なっかしいなあ。

ちゃんと洗面所に入るのを確認して朝食の仕上げを始める。

「いただきます」

「ますー……」

顔を洗ったにも関わらず眠そうなユキ。

まあ昨日も夜更かししてたみたいだな。

『本日……市で熊が七頭降りてきましたが、無事に遠投され山に帰されました』

いや無事じゃねえから…。

つかどこのどいつだよ、熊七頭遠投できる猛者は。

ツツコミ所満載なニュースを見終え、朝食も終わる。

「ユキー、行くぞー」

「うえーい……」

まだ眠いのかよ……。

「新学期くらいシャキツとしろシャキツと」

「無理ー……」

はあ……まあ時期に生活リズムも戻ってくるだろ。

ガスの元栓も、戸締まりも確認した。準備OK。

「行くぞー……って寝とる…」

「……むにゃむにゃ」

仕方ないので担いで行く。

玄関を出て、鍵を閉める。

うん、新学期には丁度いい晴れたい日だ。

背中で寝息を立てるユキを担ぎ直し、門を出る。

ん？あれ？

何故か朝も早からお隣のアパートに引越業者の車が。それも二台。

誰か入るのかな？

そんな事を思いつつ、通学路に行く。

「お！小原兄妹。おはよ！」

「山田。おはようさん」

「山田じゃねえよ！柏木だよ！ってなんだ？小雪さんはおねんねか？」

「ああ、昨日夜更かししたせいだな」

大変だな、と言って横に並ぶ山田。

くだらない事を話ながら通学路を歩く。

「……ふぁーあ」

「ユキ、やっと起きたか」

「うん…。もちよっと…」

グリグリと頭をこすりつけるユキ。

「ほれ、人も増えるから、ここまでだ。よっと」

「ぶーぶー」

ぶーたれるユキを下ろし、通学路に行く。

俺達は『変態の橋』を渡る。この橋を渡れば学園はもうすぐ。

ちなみになんで変態の橋って呼ばれてるかというと…

「ふはははは！ ゆけえ！ あずみ！ 王の威光を示すのだ！！」

「英雄様ー！ 分かりましたー☆」

人が乗った人力車を自転車レベルで引くメイドがいたり…

「ほーらお姫さま抱っこだー」

女の子を侍らす無敵先輩（女性）がいたり…

「まさに変態の橋…」

ニヤーン

「いや、良也。お前も変態の中に入ってるからな？」

カーカー

「何を言う山田。俺のどこが変態なんだ！！」

ワンッ

「いや、お前周り見ろよ」

周り？

辺りを見回すが何の変哲もない。

「いつも通りの光景だが…」

「いや確かにいつも通りだがおかしいだろ！？なんでこんなに動物が寄ってくるんだよ！」

まあ理由は簡単。

俺のチートに関係してるんだがな。
存在最強。体臭までもが存在最強。よって、人より嗅覚がいい動物
たちがよってくるのだ。

「わんわん！」

ユキが犬と張り合う。

「ほらほら、ユキ、汚れるよ」

パッパッとユキの汚れを払う。

「良也は学校で、キングオブアニマルって呼ばれてんだよ…。知っ
てんのか？」

「うん？ ああ、そういやそうね。カッコいいじゃん」

龍の化身なんて二つ名より全然マシだよ。

「はあ……なんでこんなのがエレガント・クアット……」
「うお！ ユキ！ それは食べられない！」

「でも、僕朝ご飯食べてないー」

「おユキさんや、ご飯はさっき食べたでしょう？」

なんだかんだで騒がしく通学していくのだった。

「お…お…小原、あった。B組だ」

そしてすぐ下にユキの名前も。

「良也とおんなじー」

そだ、ついでに山田も。

「や…や…や…。山田、残念ながら違うクラスのようにだな。達者でやれよ」

「山田じゃねえよ！あるよ！ほら柏木！同じクラスだよろしくね！」

「うん、よろしく」

「よろしくー♪」

騒ぎながらクラス表を見る。

まあ騒いでいるのは俺達だけじゃないがな。

F組のクラス表の前では、有名な風間翔一を始めとした一団が騒いでいる。

一癖も二癖もある生徒が集まるF組だが、風間ファミリーは更に飛び抜けて癖がある。

風間翔一。風間ファミリーリーダー、イケメン、奔放。

エレガンテ・クアットロ（川神学園イケメン四天王の通称）の一人。

他ファミリーについては、まあ次の機会に。

「良也、小雪さん、早く行こうぜ」

「そうだな。ユキ、行こう」

「うんっ」

ノロノロと教室に入るのだった。

「はい。B組の担任の普^ふ常^{じょう} 通^{つう}人^{じん}です。普通に生きるのが人生の目標です」

うわぁ…。普通な常人だよ。何から何まで普通過ぎる…。
目の前にいるのに忘れそうなくらい特徴のない顔。

担任の自己紹介が終わり、一同、全校集会のためにグラウンドへ。

ぐでえーつと集会を聞き流していると

「良也、良也」

「ん？なんだ？」

「ほらー、東京タワー」

あやとりで東京タワーを作るユキ。

「はいはい、凄い凄い」

「ほらー、チョウチョー」

「はいはい、凄い凄い」

「ほらー、ガラパゴスオオトカゲ」

「それは凄すぎるな…」

もはや芸術。

「お前ら、あんまり騒いできると怒られるぞ？これから学園長の話だし…」

後ろから山田が注意してくる。

確かに学園長の話で喋るのは自殺行為だな。

静かにする。

「ほらー、徳川家康ー」

「うお！リアルすぎる！」

「ちよっ！？おまつ！？」

相変わらず騒がしい三人だった。

そして無論。

『喝あー！ー！ーっ！！』

こうして学長から喝が入る。

2年、3年は慣れているが、1年生は面食らう。

「うへえ、相変わらずすげえ喝だよ」

「気をつけろよ」

「お前らだよっ！」

『喝ぁー！ー！ーっ！』

2 喝目いただきました。

『さて、どうやら新学期で浮かれておる生徒もいるようじゃが…』

肅々と学長の話は進む。

『今の若いものにはハングリー精神が足りん…』

この川神学園の根本、ハングリー精神を養うこと。

なんで、このご時世に決闘制度なんて酔狂なモノを導入しているのだ。

勝ちを求め、負けを嫌え。

それが人生を勝ち抜く秘訣だと教える。

何度も話されたことなので、いい加減に聞き飽きた。

まああくびなんてしたら喝られるからしないけど。

『…というように、平凡な生活を送り、腑抜けた生活もまた一つの

選択肢じゃろう』

何故か学長が俺を見た気がした。

『じゃが僕は、勝ちを貪欲に求める者が成功者になると考えておる。皆、有意義な学園生活を送るようにな』

そう締めくくり、学長の話は終わる。

教室に戻り

「さて、普通に自己紹介しようか。普通に一番から出席番号一番はああああ ああああさん。」

恐らく名字を考えた祖先や両親やは連打したんだろう…。

不憫な子…。

「小原良也です。よろしくお願いします」

「小原小雪です」

無難に終える。

ここで狙う人は恐らく猛者かアホ。

「夢は良也のお嫁さんー♪」

アフオオオオオオ!!

ざわ…ざわ…

…近親相姦?

…血は繋がってないって噂だぜ

もう逃げ道なんてねえんだ…(ry

「はい、次。次の人は普通にな」

ありがとう普通先生!

天の助けだ。

若干の波乱を巻き起こしつつも自己紹介は終了。

軽い連絡を終え、後は解散。

「さて、んじゃ帰るか」

「おー♪」

いつも通りユキと帰宅。

廊下に出ると見知った顔。

「お？良也、久しぶり」

「おや、大和君」

彼は直江大和。

風間ファミリー所属。風間ファミリーの軍師。成績優秀。交友範囲が広い。
前回のテストでも好位置をキープしていた。

山田からの紹介で知り合ったが、好青年で付き合いやすい。

「良也は今年度もB組か…。S組へはいかなかったんだ」

「うん、面倒だし。そういう大和君もFだろ？やっぱり風間ファミリーが多いから？」

「そうだね。やっぱりS組は肌が合わないから…」

そう言って頭をかく大和君。

二人で軽く当たり障りのない雑談をして別れる。

多分今日も彼は新しい交友範囲を広めるのだろう。

「良也ーお腹空いたー」

「はいはい、んじゃ早く帰ろ……む!？」

殺気!!

バツと後ろを振り返ると、そこには時代錯誤もいいところな和服姿。制服はどうした…。

「むむむ…小原小雪…」

「?僕になにか用？」

彼女は不死川 心。

何故か…まあ理由は検討つくが…必要以上にユキに絡む人。

理由は恐らく、ユキがテストで毎回絶妙に不死川の丁度ひとつ上につけてるからだろう。

なんか出身が御三家と呼ばれる程の名家らしく、かなり選民思考が強い。

関節技を使いこなし、学園内の武力ランクでも上位に食い込む使い手らしい。

「次のテストで見ておれよー!」

「?」

なんか捨て台詞を残し、去っていく不死川。

「今のだれー？」

「おいおい：一年の時に決闘もやったじゃねえかよ：」

いっぺん不死川がユキに決闘を申し込んだ事がある。

しかし、アウトレンジからの蹴りの応酬に、不死川はあえなく負けた。

まあ：ユキ強いしな。

さて、道草くったがとっとと帰るか。

いざ家につくと、

「おや、丁度いい所に帰って来たようですね」

「そうか：今日は半ドンだったか」

家の前に見覚えのある二人が。

「確か…S組の葵と井上だっけ？いきなりどうした？」

「ええ、隣に引っ越してきたので、ご挨拶に参りました」

隣？……あ。今朝の引越業者のトラック。

この二人だったのか。

葵 冬馬。

S組所属。イケメン。成績優秀。バイセクシャル……らしい。
エレガント・クアットロの一人。

井上 準

同じS組所属。ハゲ。ロリコン。恐らく趣味は合う。よくF組の口
リ委員長を眺めている。

葵を若と呼ぶ、恐らく昔から親の繋がりと一緒にいるせいだろう。

「そか、んじゃとりあえず上がってくれよ」

「ん？よろしいのですか？」

「もち。どうせ俺ら二人しかいないんだ、賑やかになって嬉しいよ」

ニコツと笑って家の鍵を開ける。

「ならお邪魔しましょうか。準、いいですか？」

「ああ、若がいいなら構わねえよ。荷解きもほとんど終わってるし

な」

葵と井上は俺の後について、家に上がる。

「ま、座ってくれ」

ソファーを勧め、俺はお茶を入れる。

ユキは井上の頭をペチペチ叩く。

「ハゲー」

「ユキーハゲにハゲって言っちゃ駄目でしょう」

「いや、何気にお前も酷いから」

井上はユキの頭をポンポンする。

「なんでハゲてるの？」

「昔、一度坊主にしてから、なんか…こう、余計なものが無いほうが思考がクリアになる気がしてな」

ある意味悟ったのか。

「ほい、お茶」

「ありがとうございます」

「すまねえな」

ズズッと茶をすすする。

ユキはジュース。

「そーいやなんで急に引越したのか？」

気になった事を聞く。

「私の家のニュースはご存知でしょうか？私の父親の不正が公になって一家離散、私達はこうして奨学金を借りながら一人暮らしと相成ったのですよ」

ああ、今朝のニュースか。

「へー。そーなのかー」

大変だなあ。

「：他に何もないんですか？」

葵が心配するような、そんな表情を作る。

「ん？何が？」

「私の身内から犯罪者が出ます。父が全て被って、私に捜査の手は伸びませんでした。勿論私も少しはその一端を担ぎました。普通ならば白い目で見るのが当然かと…」

「そんなのは知らん。別に親は親だし、捕まってないならそこで話は終わりだろ？他の奴は知らんけど」

ユキだってそうだった。親はド畜生かもしれないけど、子に罪はない。確かに一端を担いでたとしても、酌量の余地は充分あるだろ。

「そう…ですか…」

葵は安堵したような、井上は感心するような、そんな表情を浮かべた。

「良也君、よろしければ友人になっていただけませんか？」

葵から意外な言葉がでる。

「別に友人なってくれ、なんて言わなくても、もう家にまで上がる仲だろ」

ニヤリと笑って返す。

「……そうですね、いやあ良也君には一本とられてばかりです」

人受けのいい笑顔を浮かべる葵。

「んじゃ、冬馬と準だな。お隣さん、よろしく頼むよ」

「ええ、よろしく願いします」

「おう、頼むよ」

男三人で笑い合う。

「良也ーお腹空いたー」

そうだった。

「おけ、んじゃ作るか、二人も食ってけ」

俺は台所に立つ。

俺が料理を作っていると、リビングでは。

「はい！紙芝居」

「ん？手作りか？」

「そうだよー僕特性紙芝居」

ペラリと紙芝居を読み始める。

「昔々、あるところに、お爺さんとお爺さんとお爺さんがいました」

「お爺さんばっかだな…」

準、気にしたら負けだ。ユキの紙芝居は浸食してくる魅力があるぞ。

「三人のお爺さんは、齢80歳になってもニートでした」

「世知辛いな…」

「ある日お爺さん達のお父さんが言いました。「私はもうダメだ…遺産は仲良く分けるんだぞ…」お爺さん達のお父さんは死にました」

「……………」

「三人のお爺さんは骨肉の争いを始めました。ですが三人とも心筋梗塞で死にました。ですが三人のお爺さんの心は、みんなの心の中に根付いている筈です」

「根付かねえよ!!」

「めでたしめでたし」

「めでたくねえよ!」

準。いいツツコミの腕があるな。山田のライバルか。

「いやぁ小雪さん、素晴らしい紙芝居でしたよ」

「若……どこらへんが…」

「はい、これをあげましょう」

ユキは冬馬から飴をもらい頬張る。

まあ仲良くて何より。

そんなこんなで昼飯も完成して、四人で食べる。

「良也君はS組に入らないのですか？」

そんな問いが冬馬から。

「いんや、めんどいし。ガリガリ勉強するなんて柄じゃないし」

「良也なら別に今のままでもS組でもやっていけるんじゃないか？」

「いや…それにS組って変人ばっかじゃん」

「お前……俺らを前にそれを言うか…まあ否定はできないが」

S組もF組に負けず劣らず変人ばっかだし。

「それにしても良也君の料理は絶品ですね。とても美味しいですよ」

「まあ料理は随分やってるからねえ」

具体的には数十年。
中華が一番得意です。

そんなかんじで四人で穏やかに昼食タイムをエンジョイするのだった。

昼食後二人は部屋の片付けをすると帰っていった。

しばらく家事をして、夕方くらいには時間があいた。

そうだなあ、少し散歩でも行くか。

「ユキー、散歩…」

寝てる。

ソファアの上で丸くなってるユキにタオルケットをかける。

河川敷まで散歩にでる。

散歩、というよりは昔の習慣。警邏みたいな？

まあ我ながらじじくさい趣味だと思う。

学園へ続く変態の橋。

その下には多馬川が流れている。この川周辺には武家が多く…うん
たらかんたら…。

夕日が辺りを照らす。

「オイ、お前！」

川面に夕日が反射して、キラキラしている。

「無視すんなっ！」

この様子なら明日も晴れるだろう。

「このっ！バカにしてっ！」

ブンッ！

ヒョイツ

背後からの一撃を避ける。

さあて、帰るか。

「!?!?…どうやら大当たりみてえだな」

うわあやべ、油注いだ。

チラッと背後を確認する。

あ。

知ってる顔だった。

山田に誘われてついていった裏格闘場。その出場者の女の子。

奇抜な色の髪。小悪魔的な顔。小柄な体。そして何故かゴルフクラブを肩に担いでいた。

つかさつきそれで殴りつけてきたのかよ…。

「お前だろ? タツ姉ノした奴って」

「アハン? ファツチャネー?」

とりあえず適当に返してみた。

「うお!?!? 外人かよ!?!?」

あ。アホの子だ。

「え、えーと、あーゆー野郎？」

みりゃわかんذار。

「いや日本語でおk」

「なんだよ…百年くらい寿命縮んだよ」

どんだけ長生きなんだよ…。

「お前タツ姉ノした奴だろ！？」

タツ姉Ⅱチャンピオン。確か辰子だったよな。

「いえ、人違いです」

「ウソつくなよ！アミ姉から言われた特徴にそっくりだからな！」

「ほう、その特徴とは？」

「えっと、イケメン」

ありがとう。

「……………え？それだけ？」

「うん、だから毎日イケメンを殴りながら探してた」

川神市のイケメンの皆さん、ご冥福をお祈りします。

「んで、初めてかわされたから、お前で決定」

うわぁ…はた迷惑…。

間違っていないけどな。

「まあ落ち着け。まずは自己紹介から始めよう。お互いを知ることが第一歩だ」

「ウチは板垣えんじえるだ」

うわぁ…最近の親っぽい名付け方…。

「そうか…じゃあ天使」

「天使って呼ぶなあ!!」

ブンッ

ヒョイッ

え？俺なんか間違った？

「しかもなんで分かった!?!」

ブンッ

ヒョイツ

ああ…本当は天使って名前なのか…。
だからえんじえる。…………いやそれもどうなの？

「いや、天使。いい名前だと思う。自信を持て！」

ハンドソニックとか使えそうだし。

「うっ…。昔イジメられてたんだぞ！」

「いや、そいつらがバカなだけだ。可愛いと思うぞ。名前だけじゃなくて顔も」

可愛いモノを可愛いと言える良也です。

「う……本当か？」

「本当。真剣って書いてマジと読む」

「…なら、お前だけは天使って呼んでもいい…」

顔を赤くしてもじもじする天使。

「じゃあ天使、また会おうな」

「え？…うん？」

「アディオース！」

超速で走り去る。

「……って！？あー！名前教えてけー！！」

そんな声が聞こえたが、俺は今風になっているので聞こえない。

ユキの待つマイホームへ一直線。

明日も平和でありますように。

真剣で新学年（後書き）

なんでイケメン四天王にいたかは作者にも不明。

とりあえず京極…だったけ？京極先輩を外してエレガンテ入り。

天使の名前の設定ってこれでいいんだっけ？やはり再プレイすべきだなあ…。

真剣で決闘（前書き）

いやはや、勢いしかないこの小説。
いい加減本編やり直そう…。

真剣で決闘

「ふぁー…あ」

夜が明ける前に目を覚ます。

時刻は朝5時。今日はいつものより少しばかり早い。

いつもどおり、軽く朝汗を流す事に。

そだ、今日はちょっと早いし河川敷まで行こうかな。

昨日は思わぬ乱入者がいたし。

板垣天使を思い出し、軽く頭をかく。

それにしても…天使、俺を探してるって言ってたよなあ…。
もしかしたらあのサドお姉様やあの柄の悪そうな男や怪力チャンピオンも…。

ブルブルッ

いやーんな予感を慌てて振り払う。

こんな時は体を動かすに限る。頭をカラッポにしよう。

そう思い、ジャージに着替えてタオルを持って家を出る。

河川敷にはやはり誰もいない。

犬の散歩やランニングにもまだ早い時間だしな。

まあなんとなく巻き込まれそうなので、できれば誰にも見られたくない。

前に山田をノしたのはこれが理由ね。

まあユキには知られてるけど、誰にも言うなって言ってるから大丈夫だろう。

シュッ！シュッ！ヒュッボボボッ！

昔は格ゲーごっこをよくやっていたが、今は格ゲーごっこはあまりしない。

実践的な立ち回りばかり。

理由は簡単。格ゲーが普通にあるからだ。

まあ偶にキャラに憧れてやってるけどね。

まあのんびり平和な人生を歩む為には全く必要ないけどな。

ただ……いつか、力が必要になるかもしれない。

それは身を持って知っている。

俺は昔、自分の力量すら知らなかった。

あの時は存在最強の意味を知らなかったのだ。

力を知らずに振るった結果が：

いや、止めよう。

俺は答えを得た。

それでいい。

：答えをくれた、愛しい人の思いは胸にある。

だからこそ、自分の力は把握しておく、伸ばしておく、制御しておく。

誰かを守る為に。

まあそんな機会ない方がいいんだけど。

というか機会を無くす為にひっそりと生きてるんだけどねえ。

そんな益体のない事を考えながら舞う。

徐々に加速していく演武。

低速、中速、高速、そして、神速に至る。

俺の周りに存在するのは空気すら許さない。

そう言わんばかりに拳を、脚を振るう。

「おお…!!」

へ？

ズルッ

ゴチーン！

「ふぉー！俺の脳が真っ二つ！」

転けた所に丁度石があって頭に直撃。

ゴロゴロとのたうち回る。

「大丈夫！？えっと…大和が右脳と左脳があるって言ってたよ？」

知ってる。

「いててて…、あれ？川神さん？」

顔を上げると、体操着姿に、タイヤを2つくりつけた川神さんの姿が。

ナイスブルマ。

それにしても前時代的な特訓法ですね。

この子は川神 一子。

風間ファミリーのペット的存在。風間ファミリーからはワン子と呼ばれている。川神院にて武術を学んでいる。何故か詠（賈馱）を思いだした。

「うん…ごめんね、確か小原君だよね？」

「おりよ？なんで俺の名前を？」

「うん、大和がよく言ってるし、キングオブアニマルだよね？」

ニコッと笑う川神さん。

おお、初めて二つ名に感謝したい。

「でも、小原君凄いなだね！全然見えなかったよ！」

キラキラした目で見られる。

あ……朝練見られた！！

「川神さん。ここで見た事は……公言しないで……」

「あ！小原君！ごめんね、早く行かなきゃ間に合わない！」

川神さんはタイヤを引いて走り出す。

「あー……行ってしまった……」

ズーン……。

マジかよ……。やっぱりこんな気まぐれなんか起こすんじゃないかった……。

いや……まだ大丈夫だろう。口伝で伝わっても、やはり人ならば目で見なきゃ信じられないだろう。

そう、人前で本気を出さなければ……。

その時はそんな事を考えていたが、運命とは非情であると、この日感じるのだった。

家に帰り、朝飯と弁当を用意してユキを起こし、着替えて家を出る。
まあ朝のルーチンワークだな。

玄関を出ると、

「やあ、奇遇ですね」

「おはよーさん」

丁度、冬馬と準も家をでる所だった。

「おはよう」

「おっはよー」

俺らも挨拶を返し、自然と四人で学園に向かう。

「ねえねえハゲー」

「ん？なんだ子猫ちゃん」

「なんで人は生きてるのー？」

「予想外に難解な質問がきたな…」

ユキと準は中々ウマが合うらしい。

二人を横目に見ながら冬馬と話をする。

「いやはや、私達は今年度初登校ですよ」

「あ、そっか、昨日は引っ越しだったもんな」

「ええ、急な引っ越しでしたから。一応午後からは学園にも行ったのですがね」

冬馬が言うには午後から学長に会って、奨学金の申請やらでてんやわんやだったらしい。しかし、元から学業、生活態度も良好。学長のお墨付きで奨学金の申請は受理されたらしい。

「大分生活が変わりましたから、苦労していますよ…」

「そら、セレブから貧乏じゃ苦労もするわな。まあ安心しろ。飯位ならウチ来て食べばいいから」

「本当に良也君はいい人ですね。……惚れてしまいそうです」

ズザザザザ！

「是非ともお友達で！」

噂かと思いきや本気で両刀使い！？

「警戒しなくてもいいですよ。私はバイですが、愛を確かめるのは合意のもとに行うべきですから」

爽やかに言う冬馬。

バックに薔薇が見えるぜ…。

「まあ永久に合意しないがな」

「つれないですね…」

本気で残念そうな顔をするな。

ワフッ

「ん？ おお久しぶり。ほれ、犬用クッキー」

ナチュラルに犬と話し、おやつを上げる。

ちなみにここらを縄張りに行っているボス犬。最近保健所が五月蠅い中を生き抜く猛者だ。

ワンツクウーン…

「そっかあ…。その時はウチにこい。匿うくらいならできるから」

「良也君、参考までにその犬はなんて言っているのですか？」

「ん？ 最近保健所の動きが活発らしくて迂闊に身動きとれないんだって、なんか誰かが通報したらしいそうだ」

世知辛いなあ。

「そうですか…。大変ですねえ」

冬馬も犬を撫でる。

「いや、若。ツッコまないんだな…」

準がなんか言うが冬馬は気にせず犬を撫でる。

相変わらず動物に囲まれながら、通学路に行く。

…あ！良也君と冬馬君よ！

…いやー！まさか二人揃って！？

生徒が増えるにしたがってひそひそ声が多くなる。

まさか俺のホモ説が浮上してるのか？

若干鬱になる。

そんな声に混じり

…葵の親、捕まっただって？

…ああ、らしいな…

ピキッ

…犯罪者の息子

ピキピキッ

…よく学校にこれるよな

恐らくはやっかみ。だが…友人をバカにされちゃ黙ってられねえ。

なって一日だろうと、友人は友人。
俺は守りたいモノは必ず守る。

「お前ら…」

「良也君、いいのです」
機先を制される。

「これも贖罪。とうに覚悟はできています」

クールな表情だが、どこか影のある表情をする冬馬。

「私は大丈夫です。私には良也君や準という友人がいるだけで救われていきますから。だから尚更良也君の手を煩わせる訳にはいきません」

柔らかい笑みで言う冬馬。

「…はあ。分かったよ。俺は手を出さない。
だけど……GO！」

俺の一言でカラスや犬、猫が先程悪口を叩いた奴らに殺到する。

「動物達ならしょうがないよなあ？」

ニヤリと笑っている。

「……私は本当に幸せ者です」

通学路はプチパニックになったが、俺達の表情は明るかった。

冬馬達はS組へ、俺らはB組へ入る。

「おーす。小原兄弟」

「おは」

「おっはよー」

「おう、小雪さんは相変わらず元気だねえ」

山田が声をかけてくる。

「朝の騒ぎってお前がやったのか？」

「ん？朝の騒ぎ？」

「あの動物達の反乱だよ」

あー。

「さあ？最近の人間に怒りを覚えたんじゃないのか？」

「ふーん…。あんまり騒ぎ起こすなよ？危うく保健所に通報される
ところだったらしいぞ？」

げ。マジかよ。気をつけなきゃなあ。アイツらに迷惑かけるのは悪すぎる。

「まあ言い聞かせておくわ…」

主に俺に。

「そうしろ、っと普通先生くるな」

そう言って席に戻る山田。

ちなみに普通先生ってあだ名な。

「さて今日も普通にHRだ」

ガラッと戸を開けて入ってくる普通先生。

今日の授業が始まった。

この川神学園には変わった先生が多い。というかみんな変わってる。普通先生だって無駄に普通にこだわり過ぎて普通じゃないし。

「平安時代の…」

例えばこんな歴史教師。

綾小路麻呂。

御三家の一つらしく、雅が好物。顔面真っ白、平安メイク。平安時代を無駄に重点的に教える。おじゃとか語尾につけるし、これまた選民思想が強い。不死川みたいなのは気に入ってるみたいだが。

他にも一癖ある教師ばかり、鞭振り回したりする教師とか、何でも屋やってる教師とか。

それなりに勉学に励み、昼休みがきたところで俺は運命を呪うことになる。

「ユキ、昼にしよう」

ユキに声をかけ、山田と一緒に卓を囲んだ時だった。

バンッ！

「頼もー！小原君はいる？」

威勢良く入ってきたのは川神さん。

うえ…嫌な予感MAX！

1 戦う

2 守る

3 逃げる

3の選択肢を0. 2秒でチョイスして離脱する。反対の扉から逃げようとしたら

「ワン子！いきなり決闘するって……え？」

ドーン！

大和君と正面衝突。

「いててて…あ、ごめん良也」

「ごめん大和君、余所見してた」

大和君に手を貸し引き起こす。

「あっ！いたー！」

おう…見つけた…。

「小原君！勝負よ！」

「ちょっと待ってって！ワン子、一般人と決闘なんてどうしたんだよ

「？」

川神さんに理由を尋ねる大和君。いいぞ、もっとやれ。

「だーかーらー！小原君はスッゴク強いんだって！」

「はあ：今朝も聞いたけど、姉さんも全然弱いって言うてだろ？戦鬪力は常人位しか感じないって」

ちなみに大和君が言う姉さんってのは川神百代先輩の事。

川神百代。

風間ファミリー所属。霸王。喧嘩常勝。川神鉄心の跡継ぎ。あまつさえ武道四天王に筆頭数えられる先輩だ。

ちなみに現在の武道四天王は、川神百代、鉄乙女、九鬼揚羽、橘天衣。らしい。

「むー！でもでも！今日の朝見たんだもん！」

「夢でも見たんじゃないのか？」

大和君頑張れー。

陰ながら応援する。

「いいもん！小原君！勝負よ！」

ペシンとワッペンを机に叩きつける川神さん。

川神学園の決闘のルールだ。

ワッペンを重ねれば勝負に合意した事になる。

勝負の枠は何も格闘だけではない、チェス、トランプ、駆けっこ。なんでもござれ。

学園の方針がハングリー精神を養う為らしいからな。

ただし格闘は職員の合意の下行われる。さらに武器はレプリカ。破ると最悪停学をくらう。危ないしな。

「ふはは！断る！」

ワッペンを重ねなきゃいいだけだしな。

「えーい！」

ベリッペシン！

「えー！？」

ユキが勝手に俺のワッペンを叩きつける。

「良也は負けないもんね！」

「よし！勝負よ！」

ありですかー!?

「よし、その勝負、儂が許可する!」

急に現れる学長。

「ちょ!?!学長!!今俺ヤツテナイアルよ!」

「はて、儂の目にはお主が叩きつけたように見えたのじゃが…毫碌したかのう…」

白々しく言う糞ジジイ。

「なに、お主の力量を知るいい機会じゃ。一子もいい経験になるじやろう」

「糞ジジイー!!」

「いやー最近耳も遠くなってなあ。ふおっふおっふお」

高笑いする学長。

「…学長に糞ジジイなんていったのは百代先輩以外で良也が初めてじゃねえの?」

「そうだな…。勇氣あるな」

山田と大和君がひそひそ話す。

俺は運命を呪った。

決闘は放課後グラウンドにて。

「はぁ…この授業が終わらなければいいのに…」

必死に時を止めようと時計を見つめるが、むしろ早くなってる気がする…。

憂鬱な雰囲気です業を受ける。 ああ…頭に入ってこねえ…。

学園は、久しぶりの格闘の決闘に沸きに沸いていた。

トトカルチョも生まれ、倍率は川神さん1・2倍。俺は60倍になってる。

そらそうだわ。今まで名無しのゴンベな俺が川神院の川神さん…ややこしいな…と戦うってんだからそら偏るわ。

まあ…アツサリ負けよう。
それがジャステイス。

平和を守る為に、傷つく…なんかカッコいい。

キンコーンカーンコーン

ああ…行きたくねえ。

「おーい、良也。いよいよじゃねえか！」

山田うるへー。

「安心しろ！俺は良也に賭けた！」

「私も私もー」

ユキも手を上げる。

「いくら？」

「百円」

「氏ね」

「えーだって…」

だってなんだよ。山田。

「ユキは二十円！」

「ユキ…」

「僕的全財産！」

ごめんユキ。帰ったらお小遣いやるわ。

「はぁ…行ってくるわ…」

「おー！後ろで見てるからな！」

「セコンドは僕にお任せー！」

トボトボと今日を後にする。

廊下に出ると周りからひそひそ話が。

…良也君大丈夫かなあ？

…ふっいいい気味だぜ。あの顔ボコボコにされたらいい

…お前どっちに賭けた？

…もち一子ちゃん

そんな感じの話がチラホラ。それも俺を憂鬱にさせるファクターに
しかない。

「おーおー、肩落として。大変だな、良也」

準と冬馬が声をかけてくる。

「頑張ってくださいね、良也」

「おおー…開始三秒で負けてくるよ…」

「いやいや、自信なさすぎだろ。つかなんで受けたんだよ」

「いや、なんというか…：権力？」

あの糞ジジイ…闇討ちしてやる。きっと返り討ちだが。

「まあ賭けてはやれないが、気張れよ男の子」

「応援していますよ」

「ありがと…」

二人の声援に気のない返事をしてグラウンドに向かう。

グラウンドは観客で埋まっていた。

「えーどう見ますかね？解説の百代さん」

「ワン子の勝ち」

放送部と川神先輩が実況らしい。

気のない解説だなおい。

「つかなんでワン子はあれとやる気になったんだ？」

「いえ、私には分かりかねますが…ただ、制服のまま来たということはどうやら土を付けられる事は考えていないようですね！」

あ……。忘れてた…。

「よし、ワン子、叩き潰してやれ」

「はい！」

はい！じゃねえっすよ川神さん…。

川神さんは準備体操。

俺はただぼけーっと川神さんの準備が整うのを待つ。

「この勝負、俺が審判を勤める。一子は薙刀じゃな。良也、お主は武器はよいのか？」

「はい、扱える武器なんかないですから」

鉄甲もあったが、無意味につける必要はあるまい。どうせやられる

んだから。

「ふむ、では両者準備はいいか？」

「はい！」

「ダメだ！」

「始めっ！」

うむ、最早デフォルトと化したな。このやりとり。

「はぁ！」

ビュンッ！

川神さんの薙刀での一撃。

遠心力を乗せ、横風ぎの一撃。鋭くスピードもあり、申し分ない。

でも…常人の範囲だ。

容易く見切れる。

だが！俺はあえて！

バキッ！

顔面で受けた。

「グハッ！」

大袈裟にもんどりうって倒れる。

「へ？」

川神さんは目が点。

俺は細心の注意を払って受け流した。恐らくは見破られ……ないといいなあ。学長は気づくかもだけど。

「ふむ…良也。さっさと立ち上がらないと負けだぞ？」

「いえ、もう体が言うことをききません」

「ほほう…」

頼むよ！スルーしてくれよ！

「ならば…」

試合終了を告げようとする学長。

しかし…

「続行だ」

思わぬ所から続行が告げられた。

・ ・ ・ ・
（百代）

くだらない。実にくだらない。

何故ワン子はある馬の骨と決闘なんて…。

弱い者イジメをするなんて川神の名が廃るぞ…。

ブチブチと文句を言いたくなる。

ほとんど素人。確かに隙は少ない気もするが、良くて普通に武道をかじったくらいだろう。

それが、毎日地道に鍛錬を重ね、日々少しながらも確実に進歩していく妹に勝てる訳がない。

まあワン子が勝てば、一万円が、一万二千円になって帰ってくるのだ。飯代位にはなる。

妹の勇姿を見る為に、飯代の為に、少し真面目に見守る。

「始めっ!」

じじいの合図と同時にワン子が仕掛ける。

間違いなくワン子の本気の一撃。

常人では容易く避けることは不可能な一撃。例え避けたとしても、ワン子の追撃で勝負は終わりだ。

だが私の目は捉えた。

ワン子の相手…名前知らない。

とりあえず相手は、確実に見切っていた。

だが…

バキッ！

痛烈にヒットした『音』。

ゾクリッ

有り得ない見切り。

鳥肌が立つほど見事に受け流した。

確かに音はした。

だが、あの男は歯どころか口内を切ってすらいないだろう。

あれほど上手く受け流す事は私にもできない。

ワン子は、未熟とは言え武人。

武人の本気の一撃を絶妙な加減で受け流す。

あの技量は恐らくじじいにも匹敵する。

私でも少し見逃したら入ったと見間違っただろう。

「ふむ…良也。さっさと立ち上がらないと負けだぞ？」

じじいが男に忠告する。

じじいはあの男の技量知ってた…。

だからこそワン子と戦うのを認めたのか…。

「いえ、もう体が言うことをききません」

どの口が言うんだ…。

明らかに強者。本当に常人なら、昏倒してるか口内がズタズタで喋れないはずだ。

「ほほう…：…ならば…」

じじいはやる気なしとったのか、終了を告げようとする。

ただ、見てみたかった。

あの男が隠す技量を。

体が勝手に動く。

二人の決闘の場に踏み込み、告げる。

「続行だ」

この身に宿る猛りを沈められる程の強者か、見定める為に。

・ ・ ・ ・

く良也く

「続行だ」

ずうえゝゝ!!???

突然の川神先輩の乱入。

「む? しかし百代、本人のやる気がないのなら続けても意味がないぞ?」

「やる気なら私が出させてやる」

ヤベエ。死んだ振りしよう。

「おい、その男」

「……………」

「今すぐ立ち上がり、本気をだせ」

「……………」

「さもなくば…………潰す」

「サーイエスサー!!」

起き上がりこぼしも真っ青なレヴェルで立ち上がる俺。

「というわけだ。じじい、続行だ」

「やれやれ、良也よいかのう？」

いやだって拒否権ないでしょ？どう考えたって。

「やりますよーだ」

若干拗ねる。

「んじゃ鉄甲借りていいっすか？」

「む？途中の武器交換は…」

「学園長、私は構わないです！」

川神さんからOKが入る。

「ふむ、まあ合意の上ならよいか。小島先生」

「はっ、受け取れ」

F組担任小島梅子先生から鉄甲を受け取る。

小島梅子。

F組担任。鞭を使う。鞭の腕前は凄い。体罰として生徒に鞭を振るうが、不思議と問題にはならない。

鉄甲を装備する。

うーん、久しぶりに鉄甲付けるけどしっくりこない。やっぱり昔の鉄甲がいいなあ…。

そんな事を思いつつ、改めて川神さんと向かい合う。

「えっと、さっきの大丈夫？」

「ちょー痛い」

ごめん嘘。

「でも、大丈夫だね！小原君強いし！」

じゃあ聞かないでください。

「さて、仕切り直しじゃ。始め！」

学長のかけ声と共に再び切りかかってくる川神さん。

「ハッ！」

キンッ！

レプリカだが、鉄製。
派手な金属音を立てる。

俺が一撃受けた事に辺りがどよめく。

ここで俺がとり得る選択肢は2つ。

本気を出して川神さんに勝つか、巧妙に手加減して川神さんに負けるか。

前者は論外。確実に川神先輩に目をつけられる。それだけはなんとか避けたい。

後者ならば、実力は川神さんと同じ位なんだと、見逃される可能性大。

せっかくだから後者を選ぶぜー！

「フッ！ハアッ！」

ヒュヒュン！

薙刀の刃先を小刻みに切り返し、牽制する川神さん。それをバックステップでかわし、距離をとる。

「ハアアア！」

ビュンッ！

遠心力を乗せ、倍加したスピード。

薙刀の利点は長い射程圏にある。

剣道と違うのは、下段に判定があることが有名だが、それも長い射程圏故。

だが、射程圏内は刃の回る部分だけ。すなわち懐が弱点になりえる。

「…フツ！」

ギャリッ

川神さんの一撃を捌き、一步踏み込み、突き。

「！！…くっ！？」

薙刀を盾にして凌ぐ川神さん。

少しは反撃しなくちゃ、きつと見破られるしなあ。

ズザザッ！

再び距離が開く。

「おい」

ビクーン！

「私は…本気を出せって言ったんだが…」

ば…バレてら…

ガクブルガクブル…

前門の狼、後門の…魔王？

状況は最悪。

万事休すか……。

「これ、百代。脅すでない」

「じじい、コイツの本気、見たくないのか？」

「それは本人の問題じゃからのう…。まあ本音を言えば見てみたいが…」

背後で喋りだす。やめて！。プレッシャー！

「まだまだ！ハアアア！」

ヒュンヒュン！

薙刀を回し始める川神さん。

遠心力、更に倍！みたいな？

「川神流！大車輪！」

ビュオッ！

更に振り落とし、重量と体重を乗せた一撃は今までの一撃とは比べられない威力を有した一撃。

やられるには丁度いいかな？

正面から拳で迎え撃つ。

ゴキインッ！

体重＋重量＋遠心力の一撃。

「…ぐっ！」

腕をはじかせ、俺は倒れ込む。

「どうだ！」

ジャキンと決めポーズをとる川神さん。可愛いな。そしてナイスブルマ。

「…まあいいじゃろ。勝者、川神一子！」

ワー！と沸く観客。

「……………」

まあ後ろで若干一名俺を睨む方がいますが…。

「おい」

「ひゃい！」

裏返る声、ほとぼしる冷や汗。

「名前は？」

「小原良也です」

「そうか。覚えておく。次は私と…」

「やめろ、百代」

川神先輩の言葉が学長の声に遮られる。

「お前がこんな場所で戦えば被害が広がるばかりじゃ。やるならちやんとした場所でやれ」

「いや、やりませんから」

「糞ジジイ…」

「聞こえておるぞ」

いや、俺の声は聞こえてないよね？

「両者の合意があれば、場所は用意してやる。だから今は抑えろ」

「…………まあそれで手打ちにする」

いや絶対合意しないから。

「さて、解散じゃ」

学長の号令で、観客は散る。

俺は武器を返却しに小島先生の元に。

「小原君…」

「ん？あ、川神さん。いやあ強いねえ」

川神さんが声をかけてくる。

「小原君、手加減してたよね？」

「いや、全然」

「嘘だ、今朝みたいなパンチとかだったら私じゃ絶対防げないもん」

ありやりや。お見通し。

「でもいいんだ。次は絶対本気を出させてみせるから！」

「えっ？」

「待ってなさいよ！私のライバル認定なんだから！」

「いや、ちょ！？」

「小原…いや良也っ！次は負けないわよ！」

いや勝ったの川神さんじゃん。

「私も一子でいいからっ！またね！」

手を振り、風間ファミリーの集まる方へ駆けていく川神さん…いや一子さんでいいのかな？

それをため息と共に見送る。

「力ある者は力ある者に引かれる。それが摂理……か」

いつか学長に言われた事を思い出した。

「良也、お疲れさん」

「見かけによらず武道家なんだな」

「お疲れ様でした」

山田&準&冬馬がねぎらいの言葉をかけてくる。

「まあ負けちゃったけど…」

クイツ

「ねえねえ、なんで本気出さなかったの？」

ユキが問う。

「それが…運命^{さだめ}だから…」

なんてカッコつける。

俺の平和にピシリとヒビが入った日。

そして俺はこの時、武人としての自分を見失っていた事に気づいていなかった。

それを思い出したのは、ある男との出会いが切欠だった。

真剣で決闘（後書き）

とりあえず軽くジャブ。

主人公本気は次回から。
ちなみに次回戦闘もワン子。

もうどうにでもなれー！

真剣で再戦（前書き）

何日か話をねった↓ダメだった。

ダメでした。

結果的に結局話の流れが変わらないまま進む事に。

真剣で再戦

あの放課後の決闘から、俺の周りの環境は少しばかり変わった。

まずは、一般生徒の方々の俺に対する評価がUPしたらしい。

男子からは気骨があるやつ。女子からは文武両道。まあ今までインテリな感じだったからな俺。メガネしてないけど。

そんなこんなで、時の人になってる俺だが、基本的には変わらない生活を送っている。

「フッ！」

ヒュッヒュッ！

「よっと」

懲りずに朝練も続けているが、ちよつと変わった所もある。

「オラァ！」

ヒュッ！

ガシッ

「ほいっと」

腕をとり、投げる。

ブオンッ

ドスンッ

「ぐえ…」

「良也の勝ちー」

ケタケタと笑うユキ。

「くく、いてて…。全然入らないのな…」

そう呟いたのは準。

そう、ユキ以外にも朝練仲間ができたのだ。

井上準。その人。

ファイトスタイルはボクシング。

昔から専属コーチやら最新設備やらで習っていたらしい。腕前もかなりのモノだ。

だが、それもなくなったので今は地道にランニングやらやってる。

んで、俺達が庭で朝練してるのを見てこれ幸いと偶に一緒にやってるのだ。

「しかし、あの決闘見てただ者じゃねえとは分かっていたが、本当にただ者じゃねえよな」

「買いかぶりだ。小市民だよ」

「嘘つけ…。それでもボクシングはガキの頃からずっとやってきたんだぜ？それでかすりもしないなんざ…自信なくすぜ…」

「元気だせ、準」

「元気だせー♪準！」

「薄っぺらすぎるだろ…」

俺の精一杯の慰めだよ。

「ああ、今日もやっていたんですね」

「お、冬馬もきたのか、おはようさん」

「トーマ！おっはよー！」

ここしばらくでユキは二人に大分懐いた。

二人もユキと呼ぶようになり、こうして朝も早くから来てくれる。

「二人共、朝飯の準備とかしたのか？」

「いんや、俺は全然」

「私もまだですね」

「んじやついでだ。食ってけ」

こうして朝飯を共にすることも多々。偶には弁当も作ってやってる。

そして一緒に登校。

河川敷にさしかかると、

「うわ…またモモ先輩やってるよ」

準が呟く。

河川敷には不良が束になって川神先輩と相對していた。

命知らずの馬鹿共だな。

「いやあ、根性は買うけどね」

「全くだ」

ポケットと見守る。

川神先輩が動く。

1、2、3……

指折り数える暇もなく、一撃のもと次々にノされる不良。

あ、一番キモい男には8発入れた。

それにしても早いなあ。

全員ノしたと思ったら、今度は不良達の関節を外し、積み上げていく。

あー、あれだ。テトリス。

人体では有り得ない方向に曲がってる奴もいる。

ご愁傷様です。

しかし、川神先輩は俺に気づいたようにコッチをみていたずらっ子のようにニヤリと笑う。

縦棒役の男の襟首を掴み、俺に向かって投げた。
……………投げたっ!?

ギューンとロンギヌスばりに飛んでくる男。

「おー、飛んでくるよー?」

ユキが呑気に言う。
知ってるよ。

受け流すか助けるか迷う。

「ドーン！」

バキィ！

迷っているうちにユキが撃墜する。

死んだか？

……生きてるな。痙攣してるけど。

まあ華麗にスルーが吉。

川神先輩はユキが撃墜した事に少し驚いたようだが、最後ニヤリと笑い、そびえ立つ人間テトリスをぶっ壊した。

ああーよく飛ぶねえ。

そんな感じの登校シーン。

変態の橋を渡っていると、

「おお！我が友、冬馬！」

「やあ英雄、おはよう御座います」

九鬼英雄。

S組所属。ゴールデン人力車をメイドに引かせ登校する。九鬼財閥の息子で超金持ち。武道四天王九鬼揚羽の弟。一子さんが好きらしい。

物言いは不遜ではあるが、下の者の重要さを知り上に立つ資質は多分にある。

「他の民も我に続け！王の器足る我が導こうぞ！」

ガッキーン！と決めポーズをする九鬼。

「流石英雄様ー☆慈悲深いそのお姿に、このあずみ感服いたしましたー」

んでそれに合いの手をいれんのが

忍足 あずみ

九鬼英雄の従者。メイド服。英雄の前ではキャピキャピしてるが、英雄の前以外では容赦ない。主に準が被害者。小太刀二刀を使いこなし、かなり強いらしい。

「む？ 貴様は昨日一子殿と決闘していた者だな？」

うわ、また目をつけられた。

「いやあ、一子さんは強くて歯が立ちませんでしたよー」

「そうに決まっておろう！ 一子殿は日々研磨をかさねているのだ！
……………だが」

何故か一子さん自慢をきり上げ、俺を鋭く睨む。

「貴様は何をそんなに怯えておるのだ？」

不意に言われてドキリとした。

核心を突かれた形になる。

「我も少しは武道を嗜んだ事はある。戦い自体はハイレベルだと感じた……だがそれ以上に貴様が何かに怯えていた事が気になった。何を恐れる？ 何に怯える？」

怯えていたのか……？

……いや、そりゃそうだ。

日常が壊れるのが怖いんだろ。俺は。

戦いたくない…。

平和であれ…。

「貴様が腹に何を溜め込んでいるかは分からん。だがな…」

九鬼は真っ直ぐ俺を見て。心を見透かしたように言う。

「それは傲慢だ。一子殿も武人。本気で戦わない事が人を傷つける事があると知れ」

後頭部をガツンと殴られた気がした。

核心を突かれ、思わず殺気が漏れる。

「っ！？英雄様！おさがりください！」

俺の殺気にあてられ、小太刀を抜き九鬼との間に入ろうとする忍足さん。

「下がるのは貴様だ！あずみ！」

一喝する九鬼。

「我はこの男と話しておるのだ！」

俺の殺気を真っ向から受ける九鬼。

「何故一子殿との戦いの時にその気迫を出さなかった？」

「俺の力を守る為あるんだ。無駄に傷つけ合うことになんの意味がある」

「貴様も武を振るうならば、その意味など貴様が一番よく分かっておろう！」

グサツと心の深い所に突き刺さる。

それは…知っている。

昔から力を振るうのを嫌がった俺。

しかし、色んな人から武を競う楽しさを教えられた。

弱きは強きに技術を学び、強きは弱きに初心を学ぶ。

知っていた、覚えてた“はず”だった。

「貴様の力が誰か目標となる。貴様は貴様で得るモノが必ずあるだろう」

「俺は……」

新ノ口を継げない。

「イタズラに傷つけろと言うのではない。だが、己を知り、人を知る。それは守る事に直結する」

………

「どんな力でも振るう事を間違えねばよい。

……我の言いたい事は以上だ。あずみ、行くぞ」

「は、はい！」

人力車に乗る九鬼。

「『良也』…いい気迫だった。本気で怒った時の姉上を思いだしたぞ…。あずみ、出せ」

「御意です！」

学園に向かって走り出す人力車。

「はぁ…。なぁ…冬馬…」

「はい、なんででしょう？」

「九鬼ってすげえやつだな…」

「…ええ、自慢の友人ですよ」

長い年月が過ぎ、俺は忘れてしまっていたのか…。手を、武を触れあわせる意味を。

安寧を守る事に固執し過ぎた思いは、振るわぬことで頑なになってしまった。

合わせて戦う事と、ワザと負ける事は全然違うのだ。

ワザと負ける事は、相手の誇りを傷つける事。

それを…忘れていた。

昔の俺は手加減しても、負ける事はしなかった。（特殊な例を除く）

その忘れていた事を思い出させてくれた。

流石だよ。九鬼英雄。自分を王と呼ぶだけあるよ。

ならまず俺がやるべきなのは…。

少し時間をかけて、俺が出した答えは……

「一子さん、俺と決闘してくれ」

そつとワッペンを机の上に置く。

「良也……その……」

「麻呂の授業中でおじゃるよ!」

あ……。

先走りすぎた…。

退散する。

B組に戻る。

カラカラ：

「小原兄、普通に遅刻だぞ？」

「すいません…」

肅々と席につく。

「良也、どこいったの？」

「うん、F組に」

ユキにそう答え、早く休み時間にならないかなあ、とか考えながら授業を受ける。

休み時間中に、もう一度一子さんの所に行き、決闘を申し込んだ。

一子さんはすぐに了承してくれた。

学園中は沸いた。

再び組まれる川神一子VS小原良也のカード。

学長の特例宣言もあり、再び放課後に実現した。

今回のトトカルチョの倍率は

川神一子1・8倍。

小原良也2・5倍。

未だ一子さんの方が人気だが、実力の鱗片を垣間見せた事もあって、オッズ自体は大分上がった。

まあ関係ないけどな。

授業を全て終え

「いやまさかこんなに早く再戦するなんてな…」

「まあケジメだよ」

「せいぜい儲けさせてくれよー」

笑って言う山田。

「んで？今回はどっちに賭けたの？」

「勿論一子ちゃん！虎の子の一万円！」

「最高に友達がいがあるよ…」

「儲けた分でねぎらってやるからな！」

ニヤニヤ笑う山田。

「僕は良也に一万えーん！」

あれからちゃんとお小遣いあげた。

つかお小遣い全部賭けか…。信頼されてるなあ。

「ああ、ありがと。ユキ。さて、んじゃ行きますか」

「楽しみにしてるぞー。現金的な意味で！」

うるせ。

グラウンドに出る。

前と同じく準備体操に精を出す一子ちゃん。

「良也、今日はちゃんと着替えてきたんだな」

「お？準。うん、今日はケジメつけにきたから」

「はあ…余裕なこって…。まあ頑張ってくれや。俺の二万の為にもな」

笑う準。

「お前ハゲてるのに賭けなんかしていいの？」

「ハゲ関係ねえだろ！まあいい、とりあえず俺の生活費を頼んだぞ…いやマジで」

「また負けようかしら…」

「頼むよ！これが無くなったら来月まで俺はもやししか食えなくなるんだぞ！？」

んじゃ賭けんなよ。

準と馬鹿を言い合いながら、時がくるのを待つ。

「両者、前に出よ！」

学長のかけ声にて両者が中央に。

「さて、百代先輩、早くもリターンマッチと相成りましたが、どう見ますかね？」

再び解説は川神先輩と放送部員。

「……さあな」

「えっ…あのー解説は……」

「無しだ」

「ええー…」

放送はグダグダ。

「良也。お主、武器はどうする？」

「あ、今回はいいです」

「ほほっ。良い目をするようになったな。楽しみじゃわい」

学長は一歩さがり。

「では、川神一子と小原良也の決闘を開始する！始めっ！」

戦いの幕が上がった。

・ ・ ・ ・

（百代）

今回は無駄口を叩く暇はない。

ただ見守る。

小原良也

前とは別人だ。

「始め！」

じじいの開始の合図が響く。

同時に感じるのは、強烈な気迫。

背筋に寒気が走る。

頬を冷や汗が伝った。

そして口には笑みが張り付く。

尋常ではない気迫に、ワン子の体が引きつる。

「良也…本気だね？」

「うん、前はごめん。失礼だった。だから、ケジメとしてここに来た」

二人が話す声が響く。

「あちゃー…なんかとんでもないモノを呼び出しちゃった感じよ」

ワン子が薙刀を構え直す。

「小原 良也。行きます」

スツと両手を突き出す構え。

見た事があまりない構え。

独学…か？

「セエイ！」

ワン子渾身の一撃。

スツ

「！？…フツ！セエア！」

スツスツ

インパクト音が全くしない。

完全に見切り、最小限の力で捌いているのだ。

「くっ…川神流！大車輪！」

ワン子が大技で仕掛ける。

ヒュンヒュン

「破アアアア！」

その一撃を蹴りで迎え撃つ小原良也。

「シッ！」

霞むほどのスピードで打ち出される蹴り。

バキッ！！

カランッ

小原良也の蹴りは、ワン子を捉えずに、薙刀を破壊した所で止まった。

ワン子は、一瞬呆然とした後、ニパツと笑い。

「負けました」

未練がないように負けを宣言した。

「勝者！小原良也！」

じじいの声が勝利者を高らかに呼んだ。

ドクンッ

血が猛る。

強者との死合いを求めた。

・ ・ ・ ・

（良也）

「勝者！小原良也！」

学長が俺の名を呼ぶ。

これにてケジメ完了。

「はぁ…やっぱリスツゴク強かった」

「いやいや、前に受けた時より、強くなってたよ」

これは間違いない。きっと日々練磨されているのだろう。

「そうかな…。うん！次は絶対に負けないから！」

「うん、楽しみにしてるよ」

そう言って一子さんの頭を撫でる。

「ほわ…。むう…凄い撫でテクだ…」

まあ年期が違う撫で方ですから。

ゾクッ

背後から物凄い殺気。

「小原良也 あ！私と戦え！」

鋭い視線。

張り付いた笑み。

生粋のバトルジャンキーと言っても過言ではないその表情。

川神百代。

「待たんか百代！前にも言ったがここで戦えば生徒に被害が…」

「黙れジジイ！ハアアアアア！！！」

凶撃が迫る。

近くには一子さんがいるから、流石に全力じゃないようだが…。

「……フッ」

ギャリッ！！

およそ人体では奏でられない不協和音。

川神先輩の一撃を捌く。

クソっ…鉄甲なしじゃ摩擦で熱い…。

慣れの違いか…。

「そこなくてはなあ！！」

ヒュボボボボボボッ！！

拳の弾幕。

つか学長！何やってんの！？止めてー！

「ぐっ！覇アアアアア！」

ガガガガガガッ！！

拳の弾幕を拳の弾幕で制する。

その余波が風を巻き起こし、土を巻き上げる。

「そこまでじゃ、百代。それ以上暴拳を働くならば、その力、封印させてもらう」

学長が低い声で言う。

「……チツ。本当に邪魔ばかりだな」

「然るべき時が来たら然るべき場所を提供すると約束したじやろうが」

「ふんっ！もういい。……良也。私の手を痺れさせたのは、揚羽さん以来だ。本気で戦える時を楽しみにしてる」

クルッと踵を返して去っていく川神先輩。

はぁ……ちかれたよ…。

「良也、大丈夫？」

一子さんが声をかけてくる。

「うん、平気だよ。一子さん、ありがとう」

ついたホコリを払う。

「いやービックリしたわ。本気のお姉様をこんなに近くで見るなんて」

楽しそうに言う一子さん。

「もう二度と相對したくないけどね…」

そりゃそうだ。武を競うのは楽しくてもあれじゃ死んでしまいそう
でござる。

それに手合わせの意義を思いだしたとはいえ、相変わらず好きにな
れそうにはない。ここらへんは俺クオリティ。

「後さ、一子さん、じゃなくて呼び捨てでいいよ？さん、なんて柄
じゃないしさ」

まあ今まで深く関わりがなかったから、さん付けなんだけど、まあ
本人が言うなら

「それじゃ一子だな。改めてよろしく頼みます」

「うん！良也にもお姉様にも追いつく！」

意気込んで拳を突き上げる一子。

「んじゃまたね！」

一子は校舎の中に駆けてく。

よく見たら周りには学長以外いなかった。

あゝすぐに止めなかったのは生徒を非難させてたのか…。
いや俺を心配してくれよ…。

つくづくそう思うのだった。

「よお！良也！良くやった！」

「お疲れ様です」

エラくご機嫌な準と、いつも通りの冬馬。

「良也ーみてみてー増えたー」

ピラピラとユキの手に握られた2万5千円。

「おーおー。よかったなあ。無駄遣いするんじゃないぞー」

※ギャンブルは意外と人生ダメな感じになります。よい子は手を出さない方が吉。

「本当にお手柄だせ。家計が助かる」

準はだんだん所帯地味てくね。

「しくしく…」

「さて、今日は早く帰って飯にしたいなあ」

「しくしく…」

「うんー」

「しくしく…」

「んじゃあ今日は俺の奢りで外食にでも行くか」

「しくしく…」

「準、節制を心がけましょう。それに良也君の料理の方が、私は好きです」

幽鬼と化した山田のすすり泣きは華麗にスルー。

そこに再び凶報が…

「良也、ちよいといいかのう」

「学長？まだなんかありましたか？」

「少し聞いて欲しい話があつてのう」

学長はチラッと他の四人を見る。

「…ユキと先に帰っていますね」

「すまん冬馬。頼んだ」

エアリーディングをして、先に帰路につく冬馬達。

「すまんのう、学園長室まで頼む」

学長についていく。

学園長室には川神先輩もいた。

「まずは孫の非礼を詫びよう、すまんかった。ほれ百代も謝らんか！」

「悪かったな」

別に心が籠もっていなくてもいいので、早よう帰していただけると幸いです…。

「それで本題なんじゃが…」

本題…：イヤな予感しかしない…。

「お主の腕を見込んで頼みがあるのじゃ」

「無理です」

「百代の事なんじゃ」

あるえー？

「知っての通り、百代は戦いに飢えている」

いえ、知りませんよ…。まあ殺気からしてそんな気もしましたが…。

「そこで良也に一つアルバイトをお願いしたいのじゃ？」

「はい？バイト？」

「うむ、何、簡単じゃ。百代の相手をしてほしいのじゃよ」

いや簡単じゃねえから。

サンドバック代わりっすか？

「一日一分で構わん。バイト代はそれなりに出すぞ」

「たった一分ですか？」

「うむ、川神院で戦う手筈じゃが、結界が持つのが恐らくそれが限界でのう。儂も老いたものじゃ」

楽しそうに笑う学長。

俺はNO！と言える日本人！

「あいにくお金は困ってませんので、お断りします！」

なにやら川神先輩から凄まじい殺気がするが、あえて気にしない。

ガクブル…。

「ふむ…。まあ断られては仕方ないのう…。まあ気が向いたらいつでもきなさい」

永久に気は向かないでしょう。

「話は以上じゃ、帰ってよいぞ」

「はい、失礼します」

学園長室を後にする。

はあ…厄介になってきた。

まあ、ほとぼりが冷めるまでは大人しくしよう。

・
・
・
・
（百代）

「失礼します」

ボタン

良也が出ていく。

「ふう…。百代とは真逆な男よのう」

じじいがため息をつく。

「これじゃ手合わせなんか夢のまた夢じゃないか。ウソつきじじい」

「ウソつきとは心外じゃな。若者なら金で釣れると思ったんじやがのう」

うむ、私なら確実に釣られた。

「しかし、良也は一体なんの流派を汲んでおるのじやろうなあ…」

「じじいでも知らないのか？」

じじいは古今東西の武術という武術を知っているはずだ。川神院、武術の総本山の名は伊達ではない。

「知らんのう。似た技を使う一派はあるが、どれも当てはまらん。恐らくは我流じゃ」

我流…。

「そして更に言うならば先程の良也は、本気ではないぞ？」

「そんなのは私も同じだろう」

ワン子が近くにいた分、力を大きくセーブした。

「百代、悪いが意味が違う。良也の力、あれは全て自力じゃ。百代のように氣を使って高めている訳でもない。良也は自らの氣を封じておる」

「なっ！？そんな馬鹿な」

氣を使わずして、あれだけの力を出しただと…？

いや…確かに不自然なまでの氣量の少なさだった…。

「本当じゃ。氣を使わずにあの力。本当に恐ろしいのう」

言われたら思いあたる節が幾つかあった。

私のアンテナに引っかけられないほどの微弱な氣。

よく考えれば、おかしいと気づく筈だったが…いや、私の慢心もあるのか…。

「どうした百代。随分珍しい顔をしておるのう」

ニヤニヤと笑うじじいに、腹も立たない。

「そうか……。なあ……じじい」

「なんじゃ？」

「世界は広いな……。川神だけでもこんなに強い奴がいる……」

「そうじゃのう……。近々武道四天王が様変わりしそうじゃ」

私の言葉にゆっくりと頷くじじい。

ますます、試したくなってきたな。

・ ・ ・ ・

「良也」

「ふえーくしよい！」

ズズッ

なんだ？風邪か？

季節はまだ春先。

暖かくして眠ろう。

真剣で再戦（後書き）

オチねえ…この小説オチねえよ！

エンディングがさっぱりも見えない事に絶望した！

全てはリュウゼツラン…いや、それを叩き折った事に悔いはないのですが、やっぱり明確な導がないのが作者の凡才ではかなりキツい…。

それでも見限らずに読んでいただける仏のような読者の皆様、覚悟してください…。

確実に理不尽なエンディングになります。まあ…完結はさせます。

どんなモノになろうとも…。

お叱りは随時受付中…。

真剣で呼び出し（前書き）

とめどない迷走の果てに、作者は考えるのをやめた…。

そして赴くままに書き連ねたら、こんなん出来ました。

ちなみに、竜兵は、マロードと出会ってガチホモになった設定でしたが、あまりにキャラが立たないので、ガチホモ設定です。原作知ってる方はスルーでお願いします。

真剣で呼び出し

今日は金曜日。

色々あった一週間だったが、やっと安寧たる休日が目の前に。

一子との決闘の後、学園がとある噂で持ちきりになった。

川神百代と互角な男、小原良也。

新しい顔ぶれのnewクラスでその噂は致命的だった。

男からは妙に距離をとられ、挨拶したら敬語で返ってくる始末。

女の子は遠目からひそひそされてる。まあ以前とあんまり変わらない態度だな。

それでドイツからきた転校生が初日から決闘（VS一子）したりで一時は沈黙化するかと思ったが、その噂は未だに弱まらない。

だが、休日さえ挟めば少しはマシになるだろう。……なるといいなあ。

「はあ…まあなるようになるか…」

俺は俺の生き方を思い出せた。それだけで僥倖だ。

武人として生きた事。

武人としての誇り。

九鬼に会ったら感謝しなきゃなあ。

そんな事を思っているうちに、昼休み。

「なあ、今日、飯どうする？」

山田が後ろから声をかけてくる。

「いつも通り弁当だよ。今日は自信作」

朝4時に起きて作った自信作。重箱五段。

ドスン

「うわ…お前ら二人でこんなに食えんのかよ…?」

「いや、友達を二人ほど誘ったから」

勿論、冬馬と準。

「え…良也って、友達いたの？」

「いるわっ！まあ二人だけだが」

「あるえー？俺は？」

「何言ってるんだよ。お前は山田だろ？」

「意味分かんねえよ！柏木だよっ！」

お馴染みのやりとり。

「……なんかお前態度変わらないよなあ」

ふと気になって呟いてしまった。

少なくとも、俺の力を恐れるなんて微塵もない感じ。

「はあ？別に変わる訳ねえだろ。」

だって……友達だろ？」

頬を染めて言う山田。

「いや、山田だろ。あ、後、山田は購買だろ？ジュースよろしく、

フェンタな」

120円渡す。

「くそう!! 山田じゃねえよ! お前の母ちゃんすげえ美人ッ!」

ありがとう。

走り去る山田。

「良也君、お招きに預かりましたよ」

「毎度すまんなあ」

冬馬と準も合流する。

「ユキー、ほら昼だぞー」

「…………。うん、食べるー」

なにやら熱心に作っていたユキが作業の手を止め、こっちに合流する。

多分紙芝居だろう。

しばらく雑談しながら待っていると、山田が帰ってくる。

「良也、ほれフェンタ。あれ、友達ってS組のやつか」

「ええ、お邪魔しています」

冬馬がにこやかに返す。

「エレガンテ・クアットロが二人も…」

なにやら山田が鬱になる。

「ほれ、とつとと、座れ」

山田を促す。

「そうだぞ…モグモグ…早く席につけ…ムシャムシャ」

「「「（男4人）……………」」」

「あつズルいー僕も食べるー」

なんで川神先輩がここに…。

いつの間にか川神先輩が俺の渾身の唐揚げを頬張っていた。

「モモ先輩、なんでここに…？」

準が意を決して聞く。

「いや、ついでだ」

なんのだよ…。

急に現れた無敵先輩に、B組の全員がたじろぐ。

「いい腕をしてるな…ムグムグ…川神院の炊事番にならないか？」

「いやです」

そんなやりとりをしているうちにみるみる無くなってく俺の力作。

とりあえず無くならないうちに俺たちも急いで食い始める。

「うむ、ご馳走さん」

満足といった様子で言う川神先輩。

「お粗末様です」

とりあえずそう言う。

「それで、なんでまたここに？」

本題を切り出すが

「いや、腹がいっぱいになったら忘れた」

さいですか…。

「むむ…やはり美少女だな……てい！」

川神先輩がユキに手を出すが

「ほいっ！」

ユキがかわす。

「む！中々やるな。だがこれなら！」

クルッ

ストン

「わー。お姫様だったのだー」

……楽しそうね。

「よし、美少女分も補給したし、大和でもからかいに行こう」

そう言ってさって行く川神先輩。

「……あの人はホントに何しにきたんだ？」

「きっと凡人には天才の考える事は分からないのですよ」

ニコリと笑いながら言う冬馬はやっぱり大物だ。

そんな感じの昼休み。

「ふぁ……。終わった終わった」

今週最後の授業も終わりの鐘が鳴り、放課後。

「ユキ、帰るぞく……。ってあれ、ユキ、どっか行くのか？」

そうそうに荷物を纏めるユキにそう問う。

いつもならば紙芝居制作に熱中してるか寝てるのに。
……。これでよくテスト上位だよな……。すっげえ疑問。

「うん、甘い物くれるって言うから」

クラスメイトな女の子達を指差し言うユキ。

おお……。ユキにも友人が……。

フラフラと女子に近づき

「ユキを……。頼みます……」

女子の手をとりユキを託した。

「ユキ、あんまり迷惑かけるなよ」

「うん！多分！」

多分かよ…。

まあ大丈夫だろう。

そう思い教室を出る。

…手…握られた…

…ちよ、ずるーい！

なにやら女子のメンツが騒がしかったが、ユキの成長っぷりに、深い感慨を抱いていた俺は気にならなかった。

山田も他のクラスの奴と遊びにいつて、冬馬&準も捕まらなかった
ので、1人寂しく家路につく。

一階の廊下が続く階段を下りていた時に、

「ぎゃっ！」

女子生徒とぶつかる。

ヤバ…ちょっと気が抜けてた…！

「あ…！」

ぶつかった衝撃で女子生徒はバランスを崩し階段を転げ落ち…

「はっ！」

なかった。

見事に宙返り、一階の廊下に着地する。

うむ、見えそうで見えなかった。何とは言わないが。

「ごめん！大丈夫だった？」

慌てて階段を駆け下りて、声をかける。

「あ…はい、大丈夫です……！？」

長い黒髪を一つに結び、整った顔立ちした少女。

そして何故か……帯刀。

「あああああのあの、此方こそすみませんでしたあ！」

ガバッと頭を下げる少女。

「ああ、こっちの不注意だったから」

手を振り言う。

「……………はっ！まさかこれは運命的な出会い！？学校の階段で生まれる友情のサクセスストーリー！？」

「やったぜ、まゆっち！これを逆手に友達になるように脅してやろうぜ！」

「いやいやいや、松風、脅しちゃダメでしょう。しかし、これを逃す手はありませんね！」

突如として携帯ストラップと漫才し始める少女。

「ああああの、交換日記から初めてください！」

「流石まゆっちだぜ！まさかの交換日記スタートとは、そこに呆れるっ！ハブられるーっ！」

ゴクリッ…コイツは上級者だぜ…。
この才能、恐らくは世界を狙えるっ！

「あわ…あわわわわ…」

そしてなんかあわわし始める、まゆっち？
軍師なのかな？

「交換日記は無理だが、友達くらいなら大丈夫だよ？」

見てて楽しいし。

「えっ!？」

そこで突如フリーズするまゆっち？

「……………（ぶわっ）」

「何故泣くし!？」

「父上……………ついに私にも…友人が……………できました…」

万感の思いを告げるまゆっち? いやそれくらいで泣くなよ。

「つか自己紹介もまだだったね、俺は2年B組の小原良也、よろしくね」

手を差し出す。

「ははははははいっ! 私は1年C組っ!! 黛^{まゆずみ} 由紀江^{ゆきえ}と申します
!!!!!!」

もの凄い握力で握られる手。

やだ…そしてなんでか睨まれてるわ…俺。

……………いや精一杯の笑顔なのか?

「とりあえず、もちつけ」

「ははははいっ！」

すうはあと深呼吸するまゆっち。ああ、黛でまゆっちか。

「……はっ！？もしや今のもちつけはネタフリ！？ここでツッコまなきゃ空気が読めない子だと思われてしまう！？」

「よし！いっちょウィットに富んだノリツッコミをかましたれ、まゆっち！」

「い、いざっ！それ、ぺったんぺったん……って、なんでやねーん！」

「……………」

「……………」

ハイレベル過ぎるぜ…。

「ごめんなさい…」

「ええー！？何故か謝られました！！」

クルクルと表情が変わる愉快な娘だ。

「まあ、別に気負う必要はないよ。気楽によろしくな」

「あっはい。よろしくお願いします」

改めてぺこりとするまゆっち。

「とりあえず、まゆっちでいこう。俺は好きなように呼んでくれていいよ」

「まさかのあだ名からですか！？ 私もついに友人をあだ名で呼ぶ日が…！ えーと、では…：…りょんりょんっ！」

「ごめん…それだけはやめて…普通に名前で…」

酷く懐かしい呼ばれ方だったが、体は全力で拒否した。

「そうですか…渾身のあだ名だったんですが…」

残念そうなまゆっち。

「そうだ、そういやそれ何？」

刀を指差して言う。

「はい、刀です」

いや、見りゃ分かる。

「あっ！ 国から帯刀を許可して貰っているので問題ありません！」
なるほど？

まあ戦斧やらよりは可愛いモノだな。

「ふーん、まあ個性だよな」

「個性…松風…なんていい響きでしょう…」

「刀を個性ですませるこの人も流石だぜ…」

ありがとう。

「つとそうだ、連絡先もついでに、赤外線あるよな？」

「……！！はいっ！この時の為に何度も送受信の練習をしましたからっ！」

「夜な夜なストラップ相手に赤外線の送受信の練習をする姿はシュールだったぜ！」

だろうなあ…。

「ほい、じゃ送信」

「おお…おお！パワーが！赤外線パワーが！！」

ホントに愉快的な娘だなあ。

お互いに送り合う。

「おk、んじゃまあ暇な時にでもメールしてくれな」

「ははははいっ！全身全霊をかけてメールしますっ！」

「うん、それじゃまたな」

「はい！また！」

元気に挨拶してくれるまゆっちに手を振り別れる。

いやはや、楽しい友人ができたモノだ。………帯刀してるが。

新しい友人ができた事に少しウキウキしながら、帰宅する。
美少女だったなあ…。

そんな事ばかり考えていたせいかは知らないが、再び面倒事に巻き込まれる事になった。

「見つけたぜえ」

「…………ZZZZ」

「前はよくもトンズラこいてくれたなあ！」

ジーザス……。

変態の橋で待っていたのは変態だった。

うわぁ…なんでまたこんな所に…。

変態を見慣れている学園生も流石に、三人…特にあの男の雰囲気
気圧され誰も近づこうとしない。

「久しぶりだなぁ…随分さがしたぜえ？」

ニヤリと笑う男、確か竜兵だっけ。

まあ男は基本にスルーだ。

俺はとりあえず天使に向き直り、

「天使、前はゴメンよ。アフターのプランがフルでビーズィーだっ
たんだ」

英語とかかすでにルー〇柴。

「え？う…うん！気にしてないぜ？」

分かったのか分からないのか疑問形で答える天使。

「…………ZZZ」

んで、立ったまま寝てるのがチャンピオン。辰子さんって言ったかな。

「それで、何用だ？俺は早く帰って必殺サラリーマンを見ねばならないんだが」

今日は最終回なんだよ。

「それはできねえ相談だなあ。少し面貸せ。話があるんだ」

竜兵が言う。

「断る。だから、話聞けよビジュアル系モドキ。俺は見たいTVがあるっつつてんだよ」

男には厳しい俺。

「ギャハハハ！リュウ、ビジュアル系モドキだって！確かに全然カッコよくねえ！」

「うるせえぞ天！いいから来いよ、アミ姉から言われてるんだよ！」
アミ姉？サドお姉様の事だよな…。

「どうしてもこねえつつうなら…腕ずくだ…」

ゴキゴキッと腕を鳴らす竜兵。

「いやリュウ、タツ姉が勝てない相手に勝てる訳ねえじゃん。バカ
だろ？」

「うるせっ！やってみねえと分かんねえだろがつ！」

ギャーギャー言い合う二人。

よし帰るか。

気配を消して歩き去ろうとしたが…

ムギユ

「えへへ、良い匂い…」

おふう…捕まった。

背中に当たるナイスな感触。

「こんな可愛い弟が欲しかったなあ…」

スリスリ…

おふう…力尽くよりこっちの方が効く…。

あっちではギャーギャー、こっちではスリスリ。

確実にカオス。

んで、結局。

「ぐおおー！ 8連敗じゃねえか！？ どんだけ強ええんだよ！？」

何故か板垣家にお邪魔している。

チャンピオン恐るべし。

あの双山はヤバイ…。

スモッグが凄い重工業地帯の一角にあるボロアパート。

そこに板垣家はあった。4人で生活するには狭いだろう室内。

そんな中で天使とこうして呑気にゲームなんかしている訳だが…。

「いい加減帰っていい？」

ユキの晩飯もあるし。

「なに言ってるんだ！勝ち逃げさせるかつ！」

足にしがみつく天使。

「ちょ、やめ、狭いんだから暴れんなっ！」

ドタバタと暴れる。

「そうだよ、もうちょつとくらい、いいじゃない」

もう片足にも辰子さんがしがみつく。

「辰子さんも天使も離せい！俺の帰りを待つ者がおるのじゃー！」

「だあああ！うっせえ！テメェら！少しくらい静かに待ってらんねえのか！！」

竜兵がプチ切れる。

「大体なんで俺が待たされるんじゃー！」

負けじと逆切れる俺。

「うるせえっ！アミ姉が帰ってこねえんだよ！少し待ってろ！」

「少し少してもう2時間じゃボケー！」

「せっかちなのは女を満足させられないわよ？坊や」

そう言って現れたのはサドお姉様こと板垣亜巳。

「なんだ、辰子をノしたっつーから超マッチョかと思ったらエラくヒョロい男じゃねえか」

亜巳さんの後から部屋に入って来たのは覇気のない中年

……だが、ただの中年じゃない。

その瞳には狂気。

圧倒される濃密な存在感。

雰囲気は川神先輩と似た感じ。

こりゃ色香に惑わされて来たことを後悔せざるを得ない。

「ああ、警戒しなさんな、俺は釈迦堂しゃかどう 刑部ぎょうぶ。しがない中年さ」

「なんだ師匠も一緒だったんか。それよりアミ姉今日のお土産はー？」

天使がそう言う。

師匠？この男がこの姉弟に武術教えてんのか？

「それよりって…。おじさん悲しくなるなあ」

飄々と言う釈迦堂おじさん。

「喜べ、今日は師匠の奢りよ」

亜巳さんがジャンクフードの山を築く。

「やった、ウチはテリヤキー！」

天使がむさぼり始めるのを横目に、俺は亜巳さんに尋ねる。

「それで、なんで俺はこうして呼び出されたんですかね？」

「坊や、せっかちは禁物って言ったばかりよ。折角だから坊やも食べなさい」

「いえ、晩飯の前に物を食べるのは、めーなので」

やんわりと断る。一刻も早く帰らねば、ユキが夕飯と言う名の暗黒^{ダーク}物質^{マター}を精製し始めかねない。

早く帰って止めねば。

ユキの料理の腕はある意味天才。良かれと思って作るのは有り難いが、食べる度に生死をさまようのは無理。

「まあいいけど、それじゃあ本題に入りましょうか」

亜巳さんは話し始める。

「前に辰があんたにノされた後に、師匠が坊やに興味があるって言うてね、それで探していたのよ」

「……………それは、弟子の仇は師匠が返すとかですか？」

「いやいや、おじさんはちょっと気になったただだよ、それでコイツら使って探してもらっただけ」

胡散臭い…。

「辰子の才能はお前さんにも分かる筈だ、俺が指南する必要もない位の武の才能。多分俺じゃ真っ向からなら押し負けるほどの力を持っている。それを負かした野郎なんて気にならない訳ないじゃねえ？」

「それで、ご期待に添えましたか？」

「いやいや、本当に凡人にしか見えないんだから不思議だよねえ」

くくつと笑う釈迦堂。

「見えないものにもド凡人ですから。ご期待に添えなくて何よりです。んじゃ、俺はこれで」

釈迦堂と亜巳さんの間を通り、アパートを後にする。

「…………おっと、忘れ物だぜ？」

釈迦堂の言葉。

ゾクッ

殺気を感じて、振り替えると釈迦堂の凶撃が。

ヒュボッ！

パシンッ！

快音を響かせ、手のひらで受ける。

「残念、俺の忘れ物じゃないみたいです」

「……………ああ、それは悪かったな。また、会えるといいな」

「絶対嫌です」

そう言って今度こそアパートを出る。

はあ…本当にもうやだ…。

気分が悪くなるような空気の中を急いで帰路につく。

・
・
・
・

（釈迦堂）

「いやあ…驚いたねえ」

そう、ごちる。

頭蓋を粉碎するつもりで放った拳。

それを振り返り様に受け止められた。

自分でも何故かは分からなかった。

こんな氣の欠片すら見られない男に拳を振るったのかが。

だが、確信があった。コイツなら確実に止めると。

これが武人の血かねえ…。

「すっげえ…、師匠のパンチも見えなかったけど、アイツ受け止めたぜ？」

天が言う。

「おじさんも歳には勝てないかねえ…」

冗談めかして言うが、背中を伝う冷や汗に気づく。

くくっ…。いや、冷や汗なんか何年ぶりにかかされたかねえ。

「それで、アイツの名前は？」

そう弟子達に尋ねる。

「あれ？なんだっけリュウ」

天使↓竜兵

「俺は聞いてねえよ。タツ姉聞いたか？」

竜兵↓辰子

「うーん…。聞いてないや。アミ姉は？」

辰子↓亜巳

「私は今来たのよ。知るわけないじゃない」

あらら：何かと謎が多い彼だこと…。

分かっているのは川神学園の生徒という事だけ。

あそこは鉄心の爺さんがいるからなあ…。

迂闊には手を出せない。

これでもおじさん長生きしたい。

川神院を破門された俺。

破門された身で川神流を関係ない者に教える。

これは禁忌。破った者は肅正される。

いやはや：我ながら難儀な人生を生きているねえ。

苦笑しながら板垣姉弟の輪に入り晩飯とするのだった。

「あの子欲しいなあ」

「ええ、睽ればいい豚になりそうね…」

亜巳と辰子は気に入った様子。

「いいゲーム相手になりそうだしなあ」

まあ天はそうだろう、普段からゲーセンに入り浸っているようだから

らな。

「いい顔してたからなあ…ジュルリ」

竜兵の趣味はおじさんには分からないなあ…。

かく言う俺も、久々に血が…肉が…魂が強者を求めていた。

『また』会えるといいねえ。

・ ・ ・ ・

（良也）

家に帰った俺を待ち受けていたのは…

「良也、おかえり♪」

満面の笑みで迎え入れる義妹の姿と…………

「ダークマター
暗黒物質。」

「どうぞ召し上がれ」

漢には……戦わなきゃいけない時がある。

漢には……退いてはならない時がある。

漢には……曇らせてはならない笑顔がある。

「……イタダキマス」

覚悟はいいか……？

俺はできているっ！！

パクリ

「……………」

「ワクワク…」

「……………」

「ワクワクワクワク…」

「…………コフツ（吐血）」

バターン

「愛なら…しかたあるめえ…」

その日俺が最後に見たのは、綺麗なお花畑と綺麗な川だった。

真剣で呼び出し（後書き）

まゆっち…可愛いよまゆっち。

これedyouやくメインヒロイン3／5。いやロリ委員長やら抜きでね。後の二人も早く出そう。

バトルは保留。今書いている恋姫の方がバトル過多なので…。

真剣で休日（前書き）

書いた話が、曜日を間違えたために急遽ユキとの休日話を書きますた。

なんか他の小説書いてると、時系列がめたんこになります。

やっぱりちゃんと読み返しながら書かねば…。

真剣で休日

「うー…やめるんだボブ……赤いコードはブラフだ……はっ!!」

飛び起きるとタオルケットをかけられソファーに寝ていた。

「すー…すー…」

ソファーの横にはユキがキッチンと布団を敷いて寝ていた。

ああ…昨日はあのまま気を失ったのか…。

「んでユキは看病してくれたのか…」

まあ原因はあのダークマターだが…。

「ありがとな…ユキ」

穏やかな寝息を立てるユキの頭を一撫でして、起こさないようにそっとソファーから起き出す。

うぐ…体痛い…。

ソファーで寝ていたせいか、体が痛い。

軽く伸びをして、起き出す。

なんだかんだで長い一週間だった。
来週には噂が沈静化してるといいんだかな。

さて、んじゃまいっちよ体をほぐしますか。

中庭に出て、ストレッチを始める。
我ながら健康的というかジジクサイというか…。

毎朝欠かさない日課。

朝の澄んだ空気がうまいぜ。

軽く立ち回っていると、

「おはー…」

「おはよ、ユキ」

未だに目が開ききらないユキが顔を出す。

「ユキ、眠いなら寝てていいよ？今日は休日だし。それともなんか

用事あった？」

「んーん、ないー…」

こつくりこつくりと頭を揺らしながら返事をするユキに苦笑いしながら

「まあ起きるなら顔洗って着替えておいで」

「んー。そうするー…」

危なっかしい足取りで、家に入っていくユキ。

朝が弱いわけじゃないんだが、どうも眠気に弱いユキ。というか、本能に忠実なんだな。ユキの場合。

軽く流しながら、そんな事を考えていると

「良也、ボクも交ぜてー」

シャキツとして、体操着姿になったユキが庭に現れる。

ナイスブルマ。

川神学園で最も素晴らしい文化だな。体操着がブルマ。

ユキとの運動は、基本的にユキが繰り出す攻撃を俺が捌くだけ。

「てりゃ」

間の抜けたかけ声に、全く似合わない鋭い右ハイキックが飛んでくる。

むっ…素晴らしいアングル…。

何がと言わない。

軽く俺が捌くと、クルッと回るユキは続けて左回し蹴りが繰り出される。

頭に当たれば脳震盪じゃ済まないレベルの蹴り。

頭を下げて避ける。

軸足で飛び、更に右ハイ。

続けざまに放たれた右ハイを今度は確実に受け止める。

「ユキも強くなったなあ」

「?そうかな?良也に一回も当たった事ないよ?」

いやまあそれは別の話ですよ。

川神先輩とまでは言わないが、そこそこの相手より確実に強い。

「うむうむ、お兄さんは嬉しいなあ」

「良也が嬉しいなら、ボクも嬉しい〜!」

この〜可愛い事言っ〜。

「っ! 隙あり〜」

急にユキのミドルキックが飛んでくる。

「ふっ。残像だ…」

かなり本気で後ろに回り込んでみた。

「なんだっ〜!」

ユキはノリがいいなあ。

兄妹の戯れ的一幕。

ある程度運動して、朝食の準備にかかる。

今日は、パンだ!

ベーコンエッグにサラダを添えて、簡単な朝食。

まあいつもより昼が近いので、これくらいで丁度だろ。

ユキはリビングでTVを見ている。

『今朝、川神市で動物園のトラックが横転する事故があり、現在、
…の一头が見つかっておりません。周辺には警察や、有志による…
…』

なにかとニュースになる事が多い川神市。
動物が逃げ出したくらいじゃ驚かねえぜ。

TVから意識を離し、手元に集中する。

カリカリにベーコンを焼き、卵を落とし蓋をする。
その間にレタスやキュウリを手早く切って盛り付ける。

トースターのパンに綺麗な焼き目がついたのを確認し、皿に移す。

「ユキー、持っててくれー」

「はーい」

ユキにパンとサラダを運んでもらい、ベーコンエッグの確認。

うむ、今日の気分は半熟。これくらいだな。

ベーコンエッグを皿に盛り付け、フライパンを水にさらし、ジャム

とベーコンエッグを持って食卓に。

「よし、食べようか」

足りない物がないことを確認し

「うん♪いただきますーす」

「いただきます」

朝食が始まる。

「……。うむ、今日の半熟は、いい半熟だ」

出来に満足しながら食べ進める。

「そーいやユキ、今日は暇なんだよな？」

「むぐむぐ……。うん、暇ー」

「そか、んじゃどっか行くか？」

「いくー！」

嬉しそうに笑うユキ。

うむ、誘い甲斐があるよ。

「よし、んじゃどこ行くか」

駅前に行けば大抵なんでもあるしな。

「むー…。良也の行きたい所でいいよー」

ユキは大抵こう言う。

例外として、色エンピツ（紙芝居作成用）とかを買いたい時は文房具屋とか言うが、ほとんど俺が行きたい所だ。

紙芝居以外にも趣味があればいいんだが…。

…よし、それじゃせっかくだしユキが得意な運動系を攻めてみよう。

確か駅の近くに、スポーツアミューズメントの施設があったはずだ。そこで遊んでこよう。

そう決めて、休んでいた食事の手を再び動かし始めた。

「というわけで、今日はスポーツデーとします」

「おぉー！」

ユキの合いの手に若干満足しつつ

「Tシャツとか動きやすい服な。必要な物は揃えておくから着替えておいで」

「はい」

ルンルンと自室に向かうユキを見送り、タオルやなんかを用意しておく。

今から向かう所は、色んなスポーツができる。

かなりの敷地があり、ボーリング、バッティング、テニスにバレーとか。カバディもできるらしい：ちゃんとやるなら全員で20人くらい必要だな。

レストランも併設していて、若者からお年寄りまで楽しめる施設。以上、簡単な説明。

「良也ーこれでいい？」

黒いロンTにジーンズというラフな格好。

「うん、おけ。行こっか」

ユキと連れ立って玄関出る。

時間的にはまだゆとりがある。
のんびりと歩きながら向かう。

「昼は何を食べたい？」

「美味しいモノがいいなあー」

それが一番難しいぜ…。

何故か今日は休日というのに、誰の姿も見かけないない。
まあこんな日もあるなあ。

そんな事を考えながら歩いていると

「犬ー、猫ー…」

ユキが、いつもの如く俺の後をついてくる動物達と戯れる。

「鳥ー、ネズミー、虎ー」

「虎!？」

神速で振り返る。

虎がいた。

グルルツと喉を鳴らして俺にすり寄る虎。
白くない普通のベンガル虎。

むう：可愛いが、なんでこんな街中に……。ってそーいや今朝のニュースでそんな事言ってたっけ。

虎の下顎をさすりながらどうしたもんかと悩む。

「乗っていい？」

「ん？乗っていいか、だって」

ガオツ！

「いいってさ」

「やたー」

軽い身のこなしで虎に飛び乗るユキ。

おお：野性的な感じ。

つかユキって根性座ってるっつーレベルじゃないよな。
我が義妹ながら、驚嘆するな。

まあ昔から俺と一緒に動物と過ごした影響かもしれないが。

「おー、ゴワゴワー」

ムニムニと虎の背を触るユキ。

「あんまりくすぐってやるなよー」

一応注意を促しておき、考える。

さて、どうするかなー。

一応、探しているだろうから、ここで待っててもいいか。
くるまでそんなに時間はかからないだろう。

「わー♪」

クルクルと走り回る虎と、虎に乗るユキ。
しまった、デジカメ持ってくるんだった。

しばらく遊び回るユキ達を見守っていると、

…あそこです！

…！人がいるぞ！

っと、ようやく来たか。

「ユキー、虎、おいで」

流石に速攻射殺はないだろうが、一応だ。

ユキを乗せたまま俺に近づく虎。

「誰かと思えば、良也ではないか」

およ？この声。

「学長、おはようございます」

向こうからやってきた一団の先頭には学長がいた。

「お主ら、今、この周辺は外出禁止令がでておるぞ。何しておる」

「外出ですね…」

しまった…そんなのが出てたのか。

「まあ他にも聞き逃した者もおったからのう…。仕方ないのう」

子供を咎めるように言う学長。

「すみませんでした。以後気を付けますね。んじゃ俺ら行きますわ。」

また」

「がおー！」

グルル：

改めて動物大行進。

「ふおっふおっふお。よい休日をな」

ん？　そういやなんで外出禁止だったんだ？

「川神殿！　と…とら、虎を捉えて…」

近くで腰が引けた警官がそう言う。

「なんじゃ、ギャグかの？」

虎を捉えるってか、くだらねえ…。

「違います！　虎を捕まえに来たんですよ！」

「ふおっふおっふお。そうじゃった、あまりに自然でう。忘れておった」

ああ、俺も忘れてた。

「すまんが良也、虎を引き渡してくれんかのう。街が混乱しておっ

てのう」

「俺が決めることじゃないんですが…」

チラッと虎を見る。

むう…つぶらな瞳。

このあたりじゃ食べ物なんて…あるけど。

「虎、やっぱりみんな怖がっちゃうから動物園いったほうがいいよ？」

野生で弱肉強食の世界を生きる事と、悠々自適に動物園暮らしをする事、どっちが幸せかは一概には言えない。

でも、ここまで連れて来られたからには動物園の方が安全だろう。下手して射殺なんかよりはよっぽどもマシだ。

グルル…

虎は素直に頷く。

「学長、戻るみたいです」

「それはなによりじゃ。すまぬが、あちらにトラックが待機してるから、そこまで案内を頼む」

「はい。んじゃ行こうか」

虎に声をかける。

ノッシノッシとユキを乗せたまま歩き出す虎。

学長以外は、物凄い勢いで離れて行く。

「噂では聞いておったが、中々稀有な才能じゃのう」

「そですか？」

もう恒例なのであんまり実感が湧かない。

「そうじゃ。猫とネズミが仲良くしている事といい、不思議な光景じゃのう」

犬の背に猫、更にその上にネズミが乗ったりしている。

「仲良くていいじゃないですか」

「そうじゃのう」

ほのぼのとトラックに向かってっていると

「じい…見つけたか……って見つかってるな」

「うわわっ！虎だ！」

川神先輩と一子と遭遇。

「百代、一子、ご苦労じゃった。もう収束しておるからの、帰ってよいぞ」

あー、もしかして川神院総出でやってたのか。

薙刀を装備した一子を見てそう思った。

「良也が捕まえたのか？」

川神先輩がそう問う。

「いえ、ちょっとそこではったり会いました」

「ばったり会ったって…。友達かなんかか？」

まあ概ねそんな感じだなあ。

「ねえねえ良也、私も触っても大丈夫？」

「うん？大丈夫だよ」

虎はユキを乗せたまま威風堂々と歩いている。

「よ、よーし…」

おっかなびっくり近づき、そっと手を差し出す。

「がおー！」

「うひゃう!?!」

ユキが吼える。

「これユキ、脅かしちゃダメだろ」

「はい」

おちやめだな。

「あーびっくりした…」

胸をなで下ろす一子。

再びチャレンジすると、今度はちゃんと撫でる事ができた。

「虎と戦うのを楽しみにしてたんだが…。先を越された…」

若干不服そうな川神先輩。

「いやいや、どんだけ戦いたいんですか…」

「午前に大和達と野球する予定だったんだ。それが半分も潰されたんだから、多少のストレス解消くらい欲しかった…」

それはご愁傷様です。

「俺らも遊びに行く途中だったんですから、おあいこで」

「全く、虎の一頭や二頭くらい一人で取り押さえろっていうんだ…」

無茶言わんでください…。

川神姉妹とじゃれていると、トラック発見。

「虎、頑張れよ！」

「またねー」

ガォォン！

一吼えする虎。

走り去るトラックを見送る。

「さて、ワン子、大和達に連絡してくれ。早く遊ぶぞ」

「はーい。良也、またね！」

「はいよー。じゃね」

足早に去る二人。

「んじゃユキ、俺らも行こう」

「はーい」

「んじゃ学長もまた」

「うむ。気をつけてな」

俺らも一騒動あったが本来の予定に戻る。

さてやって参りました。

スポーツワールドとこれまた安直な名前だが、休日というのもあり、かなりの賑わい。

外出禁止は、俺らが住んでいる側だけだったらしいな。

「さて、なにするかー」

「いっぱいあるねー」

各階の一覧が載る案内に目を通す。

二人じゃできる事が結構限られるからなあ。

「時間はあるし、少しずつやってみようかあ」

「おー！」

まずは定番、ボーリング。

「ボーリングは久しぶりだなあ」

俺は迷わず15ポンドをチョイス。

「良也ー、沢山あるよ？」

玉の前で首を捻るユキ

「ユキだと、10ポンドくらいじゃないかな？」

ユキは力あるからもう少し重くてもいける気がするが、それくらいだろう。

「ほーい」

二人で玉を持ち、レーンへ。

「やり方は大丈夫だよな？」

「うん♪」

ウキウキと玉をブンブン振り回すユキ。
危ない危ない…。

「んじゃいつてみよー」

「うえーい！」

ユキは気合い一発振りかぶる。

…オーバースローで。

「ちょー!？」

ブンッ

ゴッ

ゴロゴロ…

ガコーン!!

ストライク。

「ほえー、全部倒れたよー」

「良かったね…」

幸いスタッフは見えていなかったようで、注意されはしなかったが隣のレーンの親子がポカーンだ。

「ユキ、下手投げだよ？ 危ないから」

「そうなの？」

そうなの。

「いいか？ 俺が手本を見せるから、良く見とくんだよ？」

「はい」

今度は俺が投げる体制に。

「…よっ！」

ギューン

バギャーーン！

ストライク。

「って感じだ」

何故か転がらなかったが、気にしたら負けだ。

「分かったー」

それから二人でボーリングを楽しんだ。

スコアは想像に任せる。

スタッフが記念撮影にきたことは追記しておこう。

続きまして、卓球。

「卓球は流石に分かるよな？」

「うん、体育でやった」

ならよし。

「んじゃ行くぞー」

軽くサーブ。

「ほい」

カコンッ

「お、上手いな」

カコンッ

しばらくラリーが続く。

カコンカコンカコン……

段々お互いにノってくる。

カコカコカコ………

そして収集がつかなくなり始める。

カカカカカカカカ……

周りにはギャラリーが集まり始める。

「やるな！ユキ、これならどうだ！」パキユン！

コースを狙った鋭いドライブ。

「なんのっ！」

カッ

一歩下がり、カット気味に返ってくる。

「まだまだ行くぜ！」

ドライブとスマッシュを織り交ぜ、左右に振るがユキは華麗なステップワークで捌ききる。

流石だぜ…

俺がスマッシュを打つ度、ユキが返す度にどよめきが起きる。

しかもラリーがかれこれ10分は続いている。

なんか凄まじい事に…。

「フッ！」

バックハンドで速攻をかけるが、ユキは危なげなく拾う。

「これならどうだい！」

ピンポン球に対してラケット面を斜めに振り抜き、横回転を加えるドライブ。

ユキのコートでバウンドした瞬間に曲がる。

「っ！」

だがユキはすぐさま反応する。

しかし回転により、浮き上がって返ってくる。

「決めるっ！」

ヒュッと飛び、最後のスマッシュ……

をしたら、ピンポン球が爆散。
いや爆発はしてないが。

ラケット面に当たった瞬間、潰れた。

「あちゃー。やっちゃった……」

ヒートアップしすぎて力加減間違えた……。

「ユキの勝ちだなあ」

「わーい♪」

ギャラリィからは拍手が巻き起こる。

それよりどうするかなあ、ピンポン球ぶっ潰しちゃった…。

ピンポン球が潰れる事はよくあると、弁償する必要はないといわれた。

ありがとうスタッフさん。

アチコチでギャラリーを作りながら遊び呆ける。
目立ちたくはないが、何故か目立ってしまう…。

まあユキの楽しそうな笑顔を見ると目立っていても気にならな
いけどな。

楽しい時間はすぐに過ぎていく。

時刻は夕暮れ。

一通り楽しみ、帰宅することに。

冬が過ぎ日が長くなったとはいえ、日が落ちるのはまだ早い。

宵闇が迫る街を、二人で肩を並べて帰路を辿る。

ユキはアツチにフラフラ、コツチにフラフラと歩き回る。

その後ろ姿を見ながら、ゆっくり歩く。

ユキは、空を見上げていた。

夕日の空を泳ぐように連なる鳥を見つめている。

「ユキ、楽しかったか？」

ふと尋ねてみたくなった。
本当にただの気まぐれ。

ユキは、俺に視線を移して首を傾げる。
そして、人差し指を顎に当てて考える。

考えるというか、今日あった事を反芻しているのだろう。

「うん。良也と一緒になら、なんでも楽しいよ」

そう言って、ニコリと笑った。

ユキの透き通るような白い肌が、朱い夕日に照らされて一層際立つ。
無邪気に微笑むその姿は、幼いような大人びたような、不思議な笑顔だった。

「そっか」

「うん♪」

「よし！お兄さん、今日は頑張って晩御飯作っちゃおうぞ！」

「おおー！楽しみー」

二人で、はしゃぐように歩みを早める。

今度は、もっと色んな人と一緒にこれたらいいな。

そんな事を思いながら。

真剣で休日（後書き）

なんだかんだで、ユキとの話を書くのは楽しい。

しかし、ちゃんとキャラを捉えられているかは不明…。

真剣で日常（前書き）

マズい…ちょっと放っておいたら大分間があいた。
時間が…なきにしもあらず…。

さてはて、ぶっちゃけこっちは安価で組み立ててもいいなあ…なーんて考えちゃったり。

まあヌルヌル更新していけるように頑張ります。

真剣で日常

「ふぁゝあ、ねむねむ…」

朝がくる。

月曜日って響きが何故か鬱だ…。
分かるだろ？学生諸君。

時刻は6時。

いつもより遅いが、ストレッチがてら体を動かしておこう。

そう思いジャージに着替え、中庭に出る。

紛いなりにも一軒家。中庭はある程度の広さはある。

「すう…はあ…」

深呼吸の後、普段は押し込めている氣を体に漲らせる。

イメージは、血流。

体を巡る氣と言う名の、血。

全身を巡る氣の存在を確かに掴み、氣を操る。

この世界では、氣の総量は以前を遥かに上回る。

慎重に氣を使わないと、真空波が巻き起こるレベルで氣が猛る。

丹田から胴全体、四肢に致るまで体の隅々を網羅するイメージ。

「すう…」

大きく息を吸い、

「覇ア！」

……ッ

右足を振り抜く。

空気を切る音は、刀のそれ。鋭い無音。

氣の巡りは好調。

内気功は制約はないが、外気功を試すには中庭では狭い。

とりあえずはこれでいいだろ。

再び氣を押さえ込み、息を吐き出す。

氣を使わずに、今度は普通に体を動かす。

「お、今朝もやってるな」

「ん？ 準か。おは」

「ああ、おはようさん」

塀の向こうから、ヒョイツと身を出したのは準。

同じくジャージ姿。

「それじゃ、今日もご指南いただきますかね」

一般的なボクシングスタイルでステップを踏む準。

「準備体操は？」

「そこいらを一周してきたからな」

「おk、足腰立たなくしてやんよ」

「ちょ！学校あるんだぞ！？」

いつもの朝が始まった。

ヒュヒュ！

「へえ…また難儀な奴らに捕まってんな」

パシンッ

「ホントに…。川神先輩だけで精一杯なのに…。」
金曜日にあった事を愚痴りながらスパーリング。

ガッ、パシンッ

「よつと…。まあモモ先輩はかなりのバトルマニアだしなあ」

タッタッ、ヒュン！

「勘弁してほしい…。よつと」

ガシッ

ブンッドサッ

「ぐえ……。いてて…。まあこんだけ強けりゃ色んな奴らから目つけ

られるわ…」

準は投げ飛ばされ、芝に倒れたままそう言った。

「そうなんだよなあ…」

手合わせでワザと負ける事の失礼さを思い出したが、手合わせ自体は相変わらず好きになれそうもない。

「ところで良也…」

「ん？なんだ？」

準は抜けるような青空を見上げたまま、一片の曇りもない透き通った目で

「委員長を娘にするにはどうしたらいいんだろうなあ…」

「とりあえず…人生をやり直したらいいんじゃないかな？なんなら介錯仕るよ」

「ちょ！足光ってる！足光ってるよ！」

ごめん、ちょっと興奮した。

ちなみに俺らが言っている委員長とは

甘粕 あまかす 真与 まよ

F組所属。ロリ。F組の数少ない良識人の一人。誕生日が人より早

い事から、自分をみんなのお姉さんと信じて疑わない。

「だいたい委員長は娘じゃねえだろう、姉だ」

ロリ姉。これ正論よね。

「……ほう……それは俺にケンカを売ってるんだな」

ビキリと笑いながら怒るという器用な表情をした準。

「かかってこい……。委員長は娘より姉である事がジャステイスという事を証明してやる」

「……漢には負けると分かっているけど戦わなきゃならねえ時がある……」。

それが今だ」

準が壮絶な笑顔で突っ込んできた……

のをポッコボコにしてやった。

「ぐふう……。いくら……体が痛めつけられようと……決して折れね

えモノがある…」

準は倒れたまま、ニヤリと笑いながら

「俺の心だ」

「……………」

ゲシゲシ…

「ちょお、いた、いたい」

そんな感じで朝が過ぎる。

準と夢中でじゃれあっていた為に、弁当を作る時間が無くなってしまった。

朝食を手早く作り、通学路。

「今日は昼飯は購買だなあ…」

「おや、珍しい。良也君が弁当を作らないなんて」

冬馬が意外そうな顔をする。

「時間がなくてなあ。まあ偶には購買もいいか」

買い物をしてから帰ろう。食材も尽きてきたしな。

：つと、そうだ、あと銀行に寄っておかなきゃなあ。残金が心許ない。

そんな事を思いながら登校していると、

「ふはははは！」

背後からの高笑い。

「我が友人冬馬よ！今日も健やかなようだな！」

九鬼英雄その人だ。

「おはようございます、英雄」

柔和な表情で挨拶を返す冬馬。

「うむ。良也とその他二人も元気なようだな」

なんで九鬼は俺を名前で呼ぶんだ？
まあいいや、前のこと感謝しとこう。

「おはよう、九鬼」

俺は人力車から降りた九鬼に近寄る。

「あのさ、前に九鬼が言った事、すげえ有り難かった。感謝するわ」
改めて頭を下げた。

「構わん。何よりあれは私の想いだ。何か感じるモノがあったならば重畳。感じなかったならば、私の想いが的外れだったただけだ」

そう言って、人力車に引っ込む九鬼。

「何より、民を導くのは王たる者の勤めだからな。
あずみ、出せい！」

「御意ですー☆」

そう言い残し人力車が走り出す。

「相変わらずだなあ」

俺は人力車を見送りながらそう呟いた。

今日も呑気に授業を受け、昼休み。

「山田、お前も購買だろ？」

「山田じゃねえよ。そうだよ」

「なら一緒に行こうぜ。今日は俺も購買なんだわ」

「あれま、珍しい。んじゃ小雪さんも…ってあれ？いないじゃん？あれ？さっきまでいたのに…」

またどっかフラフラしに行ったのだろう。
冬馬あたりに保護されるといいのだが…。

「すぐに帰ってくるかな。先に行ってるか」

「分かった…だが、購買に入った瞬間から敵同士だからな…」

そう呟いた山田の瞳は戦士のそれだった。

その言葉の意味は痛いほど分かる。

何故なら…

…うおおお！

…コロッケパン一つ！

…てめっ！押してんじゃねえよ！

購買は戦場だからだ。

「良也、健闘を祈る…。南無三！」

人の波に突っ込んで行く勇敢な山田を見送り

俺は…

「食堂にしよう」

英断した。

食堂は購買程ではないにしろ混み合っている。

だが俺は一人。隣人さえ選ばなければ座る席はチラホラある。

カレーセットを頼み、しばらくしないうちに出てくる。
うーん、このチープな感じがいいもんだ。

少し歩くと、開いてる席を発見。

ストツと席に収まり、いただきます、と言った時だった。

ガッ

肘が隣の人に当たってしまった。

「あ、ごめん……って不死川」

なんで高貴な感じな不死川がここ（食堂）に？

「む、小原良也！此方が食堂にいてはならぬのか！？」

「いんや、別に」

あんまり構ってると食う時間が減りそうだから軽く流し、カレーを一口。うむ、このチープさ。どうやったら出せるのだろうか……。謎だ。

「小原良也、小原小雪はどうしたのじゃ？」

「ムグムグ…うん？今日は別行動だよ」

まさかあっちから話を振るとは思わなかった。

「そうか…」

相変わらずユキには噛みつくなあ。

「……………のう、小原良也」

「なに？」

カレーをパクつきながら味を鑑定している俺は、無意識に返事を返す。

「……そなたは庶民にしては中々骨がある。川神の者にも劣らん力がある…それにそなたの武、中々良いモノじゃった…」

「…うん」

具材に変わった所はない。だが…玉ねぎが形すら残っていない…。これが意味するのは…。

「高貴な此方が、特別にそなたを認めてやらんでもないぞ？不死川の此方に認められるのは光栄な事じゃ、喜んでよいぞ！」

「わお…ちょべりぐー」

まさか…この味わい、野菜の煮込み過ぎが…鍵？

「それで…だ。なんなら不死川家に仕えるように…」

「あっ！良也！てめっなんで優雅にカレーなんか食ってんだよ！？」

顔を上げるとボロボロな山田が焼きそばパンなどの戦利品を持って

立っていた。

「いや、なんか面倒くさいから食堂にしたわ」

「お前：ホントに：（ガシッ）：え？」

ガシッと不死川が山田の襟首を掴む。

「庶民の分際でえー！」

不死川の華麗な内股。

ズバーン。

おお、すげえ見事に決まったな。

「げふう…」

「むう！もうよい！小原良也！覚えておれー！」

タツタカと走り出す不死川。

結局なにがしたかったんだ？

「おーいおいおい…。俺の焼きそばパンがあ…」

投げられた拍子に自分の体にプレスされたペッタラコな焼きそばパンを掲げて泣く山田。

ところで不死川が置いていった食器は俺が片付けるのだろうか…。

そんな事を考えていた。

午後一の授業は体育。

A組と合同で男子はグラウンドでサッカー、女子は体育館でバレー。

「はぁ…。空はあんなにも青いのに…」

抜けるような青空を見上げて呟く。

「ヲイ。GKだからってあんまり気抜くなよ」

「いやいや、ゴール横にいるお前の方がどう考えても気抜けてるから」

山田はボールを追いかける事もせずにゴールポストに寄りかかっている。

「コラ、そこ！早く参加しないカ！」

目ざとく山田を見つけ、注意したのはルー先生。

ルー・イー

川神学園で体育を熱血に教える傍ら、川神院の師範代。師範代というのは伊達ではなく、相当強い。なんとなく酔拳を使いそうだともっぱらの噂。

「ほれ、早く行け。さもなくばGKの武器にするぞ」

「なんだよ！？武器って！？」

「こう…棒的な意味で」
「棒！？」

そんなこんなしているうちに、A組が攻め上がってくる。

「ほら、お前のせいでトラベリングもとれねえよ」

「ちげえから！？種目違いだから！オフサイドだから！」

そうだったか？

「いけ、山田。身を呈して止めてこい」

「くそー！山田じゃねえー！！」

ズザサー

山田じゃねえスライディングは、見事相手の顔面を捉えた。ん？スライディングだよな？

「ピピー。ファウル」

だろうなあ。

ああ、A組の不自然なまでの髪型をしたボールしか友達がいらないサッカー部のエースが…。

んでPK。

「良也！止めろよー」

山田め…無責任な。

ボールを蹴るのは多少顔が凹んだサッカー部エース。よく保健室直行じゃなかったなあ。

サッカー部エースは、スニーカーの横についていたつまみを捻る。

パチパチッ！

何故かスニーカーが青白く発光する。

バーローWW

大きく足を振り上げ…
振り抜く。

ドゴッ！

激しいインパクト音と共に、蹴り出されるサッカーボール。
サッカーボールは、多少平らになりつつ俺の顔面に迫る。

いやこれPKだね？

…ああ、怒ってるのね。

なんとなく納得した。

でもそんなのは知らん。

多少手加減して

「フンッ！」

ボゴォ！

ボールを殴りつける。

ボールはそのまま…

「ぐほお…」

山田の腹に当たった。

地に崩れ落ちた山田を放置したまま試合再開。

まあ自業自得だしな。

「ふむ、やはり百代が夢中になる訳ネ」

ルー先生が近づいてくる。

「いや…違う意味で夢中の方が良かったですよ」

苦笑いする。

「良也との一件があったから、ますます百代には手がつけられなくてネ。門下生が百人組手でボコボコにされてるヨ」

やれやれと肩をすくめるルー先生。

「私からも頼むヨ。百代の相手をしてくれないかね？」

「残念ながら今のところは断らせてもらいます。ただでさえ環境が変わった所ですから」

まあ…頭ごなしに断るのもどうかと思うけど、せめて心の準備が欲しい。

「ふム…。本人のやる気次第…。私も無理強いはしたくないからネ」

そう言って、授業のほうに意識を向けるルー先生。

みんな基本的にいい人だから、あんまり断り過ぎも悪い気がしてきた…。

だが生半可な覚悟で百代先輩の相手したんじゃ、怪我じゃすまない。

本気でやるなら、本気なりにちゃんと準備してから行こう。

そう誓う。

ボンッ、コロコロ…

「良也ー！ゴールキックだ！」

山田からそう声をかけられる。

ん？ゴールへキック？

ok。

「ドオツセイイ！！」

ドゴオン！

ギュオーン！

ドカーン！

ゴール。

「やったぜ、一点！」

「ちょ…おま…」

「大丈夫ヨ。川神特性のサッカーボールだから、壊れたりしないネ！」

「そこじゃないアル！」

おお！山田が異文化ツツコミを！

そんな愉快的な体育の授業。

なんか最近タガがぶっ飛び始めたなあ…。

手加減生活の反動かしら？

自重自重。

放課後…

帰りに商店街に寄り、A T Mで残高を確認する。

…？

ゴシゴシ

改めて確認する。

「何故ー!？」

残高は以前と変わらないまま。

つまり…

「あ…あいつら（両親）…忘れてやがる…」

残高は後9500円…。

このまま月末が来たら…。

ああ…ケータイ…電気…水道…。何より食料…。

良也の手元にはもう払える現金が残っていない！

良也は目の前が真っ暗になった。

……はっ！マズい、さらに所持金が半分になる所だった…。

いやどうすんのよこれ…。

ATMの前で途方にくれる。

バイト…するかあ。

こう、できれば短時間でバリバリ稼げて家事や学業に支障なくて俺

にあったバイトなんかいいね。

……すまん、社会舐めすぎてる。

ん？なんか最近超短時間なバイトがあったような…。

「なんだっけなあ…」

そう呟きながら、街中をフラフラする。

チャラリラチャラリラ…。

耳に入る電子音。

ゲーセンかあ…。

フラフラと引き寄せられる。

騒がしく鼓膜を叩く電子音は、一種の高揚感を俺にもたらす。
まあ人並み以上に聴覚がいい俺だが、意識すればある程度はシャットアウトできる。

あゝ、いいなあストΩ。

『ストリップファイトーズΩ』

攻撃が当たれば当たるほど、服が脱げていく格ゲー。
だが、選択キャラが男しかいないという誰得ゲー。
いやまあそういう需要もあるんだろうけど…。

ただ、高い操作性と高度な性能から稼働しているゲーセンが多く、
大会もある。

片側にはCPUをボコボコにしている人が座っていた。

俺はなんともなしに対戦席に座り、100円入れる。

………はっ!?

何やってんの俺!?

経済的にピンチだったのにゲーセンなんかで散財している余裕は…

new challenger!!

大きく表示される乱入の文字。

嗚呼…今はこの指が憎い…。

……まあ、押しちゃったからしょうがないよね…。

改めて対戦者のキャラを見る。

全キャラの中で一番のパワータイプ。

攻撃を受ければ服が脱げるというのに初っ端から上半身裸という豪快なキャラ。

対する俺のキャラは全キャラ中最速。

ただ紙のような防御力故に今の対戦キャラの投げコンボをフルに受ければケージは半分をきる。

たが…そこがいい。

FIGHT!

液晶に大きく文字が浮かび、両キャラともに動き出す。

…青年対戦中…

勝った。

ふん、生ぬるい。

new challenger!

すぐさま乱入される。

む？連コインか？

再びパワータイプ。

ふうん、指で捻ってやるわ（揶揄ではない）

勝った。

乱入される。

勝った。

乱入される。

……………

存外しつこいな。

俺のWINが15を数えた所で対戦席から

「ぬおおお!! てめえチマチマ、卑怯なんだよ! リアルファイトで決着つけたらあ!」

ドカドカとこちらに回り込んできたのは…

「あ、天使じゃん」

「あれ? お前…」

見知った顔だった。

ポチポチとCPUをフルボッコにしながら

「天使、狭い」

わざわざ俺の座る椅子の半分に座りフルボッコにしていくのを見守る天使。

「この店員、横の席に座るとうっせえんだよ」

あー、あるある。

乱入もないままラスボスを倒しきる。

いやはや、何度も思うが誰得…。

ブリーフ一丁になったラスボスを見ながらそう思った。
エンディングに入ったので天使に向き直り

「んで？なんで待ってたの？」

「ゲーセンで散財してたら、ウチの金無くなっちゃたんだよね。だから、奢れ」

「断る」

スタスタと店を後にする。

「てめえー！こんなかわいい子ちゃんがお茶しようって言ってんだぞ
！？」

言い方古っ！？

しかも自分でかわいい子言うか…

「まあ可愛いのは認めるが、俺には奢れる程金がないんだよ」

街を歩きながら天使と会話する。

「んじゃさ、そこらのやつから奪えばいいじゃん」

当たり前のように言う天使。

……………前も思ったが、天使には罪悪感というのがない。

裏バトルの時に、竜兵や亜巳さんにも罪悪感というのは全く感じられなかった。

どうやらこいつらは本当に奪うのが当然な環境で生きてきたのだ。

やはり近代に入ってもこういう輩はいるのだ。

前の世界じゃよくあったが、この世界では初めてそういう類の人間に会った。

今も昔も、もしかしたら人間ってそんなに進歩してないんじゃないかなあ…。

そんな哲学的な事を考える。

「てめーの力なら簡単だろ？銀行でもいいぜ！」

「天使、そういう事はめーなの。ちゃんと仕事をして対価を得る。これ正論よね」

「あんだよ、固い事言うなよ」

ブーたれる天使。

「んじゃ、面倒だけど仕事貰いにいくかあ…」

「うむ、それがいい」

「んじゃちょっと話つけてくるわ」
誰と？

「ちょっと待て天使。話ってなんだ？」

「んだよ、仕事しろって言ったのお前じゃんかよ。ちょっと気持ち良くなる小麦粉をさばくだけだよ」

「待て！違う仕事にしろ！それは明らかに危険な香りしかない！」

「はあ？文句ばっかじゃねえか…。んじゃちょっとコンクリと縄を…」

「何に使うんだよ！？日常生活でコンクリが必要になる機会はそうはないぞ！？」

「うるせえなあ…。んじゃどうすりゃいいんだよ」

む？そりゃ普通にファミレスとか…

イメージしてみた。

天使inファミレス。

「らっしーい…」

お冷やすら出さない天使。

「うるせえ。自分でやれ」
注文すらとらない天使。

「はぁ？死ねよ」

何を言われてもそう返す天使。

.....

それなんてツンデレ喫茶？

「天使、俺が金がかからない遊びをしてやるから…」

「ん？何すんだよ？」

「そうだなあ…。鬼ごっこか」

「はぁ？ガキかよ。頭大丈夫か？」

「俺が鬼。俺に捕まったら、一回殴られる。そしてまた逃げる、捕まえる、殴る。を繰り返す、名付けてリアル鬼ご…」

「怖ええよ！？」

むう…。ダメか…。

「それじゃあダルマさんがコロンビア。ダルマさんがコロンビアで
どういった扱いを受けるか、ひたすら妄想するんだ…」

「意味が分からねえから!？」

まあこんな感じでバカ話をしている分には普通に付き合い安いんだけどなあ。

恐らく板垣姉弟にとっては、罪はすでに罪じゃないのだろう。

それがどんな理由でそうだったかは俺には分からない。

境遇。生活。人間関係……etc.

要因はいくらでもある。

だが、こうして知り合ったからには真人間……まではいなくても、普通社会に生きていけるくらいにはなって欲しい。

少しずつ矯正していくかあ……。

……そうになると、あのオッサン（釈迦堂）ともいらん関わりが生まれそうだが……。

それも仕方ない。

助きたい人は助ける。

多少の逆境は範囲内だ。

「よーし! 天使! あの夕日に向かって競争だ!」

「ヤダよ」

「よし！天使！鬼ごっこ開始だ！」

「ちょ！まっ！？」

ダダダダダッ！

すぐさま逃走を開始した天使を追っかける。

「あははー待てよー」

キラキラエフェクトを背負いながら走る。

「待つか！その握り拳はなんだよ！？」

「このー待て待てー」

ブオンッブオンッ

軽く腕を振る。

「助けてー！」

騒がしく走りながら、俺はふと気づいた。

これが…現実逃避か…。

真剣で日常（後書き）

よく考えたら、不死川のフラグ立てを怠っていた…。

まあ不意に現れたヒロイン候補とご理解ください。

真剣でアルバイト（前書き）

混迷を極めるこの小説。

指針が立ったとはいえ、フラグを立てたからには回収すべきだろう、ということでのまま続行。

まあぶっちゃけバイトフラグはあるお方との遭遇の為ですが。

真剣でアルバイト

通貨という概念は、諸説あるが物々交換の非効率さを解消するため
にできたらしい。

物々交換においては、両者の合意が必要不可欠になる。
つまり欲しい物が一致しないことには成立しない。

そこで貴金属による共通の対価を使用する事により、その不和を解
消するに至った訳だ。

そしてその通貨の概念は現代に脈々と受け継がれ、こうして俺を苦
難に追い込んでいる訳で…。

「つまる所、金がないんだ」

「それを俺に言うかね…」

目の前のハゲは、そう言って表情を歪めた。

休み時間中に暇を持て余した準が、B組にやってきた所だ。

「金がないのは俺も同じだったの。お陰で委員長のプロマイド買
い逃すし…」

「別に写真なんか買わなくて実物いるだろ…」

「ばっか！家に帰ってもあの御姿が見れるんだぞ！？」

「分かったから、あんまり顔近づけるな…怖いから」

興奮する準を宥める。

「準はバイトとかしてないのか？」

「うん？今の所はしてないが、近々若が英雄の紹介でバイト始める
っつーから、一緒に、とは思ってる」

おお！それはなんともいい情報じゃマイカ！

「それって俺もできないかな？」

「まあ英雄はお前を気に入ってるようだから…なんとかなるんじゃないか？」

おー？なんか良く分からないが、気にいられているらしい。

「後で俺から話しておいてやるよ」

キンコーン…

丁度そこでチャイムが鳴る。

「おっと、それじゃあ後でS組に来てくれ」

そう言って席を立つ準。

「悪いな、頼んだ」

準を見送り、授業の準備をする。

できれば頭を使わないバイトだいいんだがなあ…。

そんで、昼休み。

いつもより二品ほどおかずが少ない弁当をユキと食べ終え、S組に旅立つ。

廊下を歩いている時に

「良也。ちょっと遊びにでも行かないか？」

「嫌です。先輩の遊びは、決して一般人の遊びじゃないです」

背後から微妙に溢れる殺気と共に声をかけてきたのは、川神先輩。

「なーなー、一体いつになったら勝負してくれるんだー。じじいも師範代も首を長くしてるぞー」

若干ダレたように言う川神先輩。

「きっと来世あたりで…」

「待てるか!!」

若干の殺気がこもったツツコミを避ける。

「一体何が不満なんだ？強者と戦える上に更に金まで貰えるって言うのに…」

……あ！

そうだ！超短時間のバイト！

川神先輩の言葉で引かかっていた事が氷解した。

1日1分のバイト。

いくら出るかは知らないが…。

「あーあー、イライラする…。いつそこで襲ってしまおうか…」

キュピンッと光る目。

「ダメですよ！学長に怒られますよ！」

「ふん、分かってる。言ってみただけだ」

いや絶対本気だったよこの人…。

「もういい。大和をいじって憂さ晴らししよー」

嬉々として2年F組へと向かう川神先輩を見送り、大和君に黙祷を捧げた。

「ちーっす。準いるかー？」

ガラッとS組の戸を開けると、刺さる敵意の目。

冬馬が言うには、毎回成績上位に食い込む俺が憎いんだそうだ。

S組の連中は、ただでさえプライドが高い奴らが多いのだが、更に成績が50番以下になった瞬間にS組追放になる。

つまり敵意を向ける相手としては俺ほど良い標的はいないわけで。

だからあんまりS組に来たくないんだけどね。

まあそれなりに死線をくぐった身としては、大した恐怖はないが。

ふと、一人の女性が目に入る。

不死川の着物より、更に異質な存在。

森林迷彩の軍服姿に、眼帯、真っ赤な髪、猛禽類の視線。

確か山田がF組と同時にS組にも転入生が入るとか言ってたなあ。

絶対あれが転入生だ。つかあんな人いたら気づかない訳がない。

俺の無遠慮な視線に気づいたのか、俺に鋭い視線を向ける女性。

おおぅ…くわばらくわばら…。

素早く視線を逸らす。

「良也、こっちだ」

準が俺に気づき、声をかける。

周りには冬馬と九鬼がいた。

「やあ、良也君。今朝ぶりですね」

「来たか。良也、話は聞いた」

柔らかに微笑む冬馬と高らかに笑う九鬼。

「おう、んで早速で悪いんだけどバイトの話なんだが…」

昼休みも半分を切っている。

「うむ、我としても好都合だった」

「あら？ 人手不足？」

「いや、そのような事は有り得ん。ただ…あずみ」

「はい！英雄様！」

あずみさんから九鬼に手渡されたのは、一枚の書類。

「警備課からの報告で、気になる点があつてな」

けいびか？

嫌な予感しかない…。

「最近、実技演習の効率が落ちてきたようだな。軍事部門共々、違う要素を取り入れようと考えていたところだな」

まさかとは思うが…。

「良也にはその警備課の教官として働く場を提供しよう」

うそーん？

粉碎！玉碎！大喝采！な九鬼財閥で俺が教官！？

「なに、心配するな。時間は土日の午後のみ。待遇は…」

「こちらです」

あずみさんから俺に見せられたのは契約書。

契約書のバイト代の欄に目が釘付けになる。

いち、じゅう、ひゃく……

「50……万？」

「む？少ないか？ならば…」

「違うわ！多いんだよ！どこにサラリーマンより月給が多い学生がいるんだよ！？」

しかも土日だけで！

「何を言っている。月給ではない。日当だ」

九鬼は疑問符を浮かべながら言う。

良く見ると契約書には、日6時間あたり50万支給、と書いてあった。

更には危険手当、残業別途支給。とまで。

開いた口が閉まらない。

「無論雇用者として、キッチンと税は管理しておく。保険についても…」

つらつらと言葉を繋げる九鬼。

まさに雇用者という感じ。間違いなく人の上に立つ男だ。

「……………」

「大丈夫ですか？」

絶句している俺に声をかける冬馬。

「…ちなみに冬馬はどれくらい…」

「私は月給で……百万前後ですね。基本的に放課後と土曜勤務です」

バカなの？

つか、あんなアパートなんかすぐに引き払えるんじゃない？。

「能力に応じた金額を提示している。友人とはいえ、妥協はない。良也の才能にはそれくらいの額をつけた、それだけだ」

高くかってくれてるのは分かったけど…。

「今はアルバイトの扱いだが、卒業の暁には冬馬と同じく九鬼財閥に入ってみてはどうだ？」

「いえ…僕ちゃんは将来のビジョンはまだなので…」

「ふむ、まあ今はよい。あずみ、同意書を」

「はい！」

再びあずみさんから手渡される書類。

「あのう…九鬼さん？ちょっと考えてもよろしいですかね？」

あまりの財力に下手になる。

きつと九鬼の人間は、スキルに黄金律を常備しているに違いない。

「む？何か不備があったか？」

「いや、少し気後れして…。こっちから頼んでおいて難だが、少し考えてもいいか？」

「ああ、構わん。警備課の教官をできるほどの者がそう簡単に見つかるとは思わん。しばらく考えるがよい」

「ありがと、んじゃチャイム鳴るから行くわ」

S組から出る。

……はあ、なんかとんでもない働き口に出会ってしまった。

まああって困るもんじゃないんだけど…。

ただ警備って事はどう考えても戦闘絡むよなあ…。

川神先輩と超短時間で戦闘するか、九鬼財閥で中時間戦闘するか…。

うだうだ考えながらB組に戻るのだった。

「あーうー」

放課後になっても俺は机に突っ伏して考え込んでいた。

バイトしないと生きていけない事だけは確かなんだが、出会うバイト先が極端すぎる…。

家事との両立が難しいのは分かる…。

短時間かつ家計を支えるほどの収入、なんてのがまず間違いなんだけど…。

別に金がうなるほど欲しいワケじゃない。

ただ、生きていけるくらいでいいんだよ…。

つか、そもそも両親と連絡がとれれば問題ないんだが…今どこにいるやら…。

スパーンッ！

「小原良也っ！」

B組の戸を勢いよく開けたのは

「不死川？なんだ高貴なお前らしくないなあ」

「いいのじゃ！お主に話があるのじゃ！」

ドスドスと目の前に立ちふさがる不死川。

「お主、バイトを探していると言うておったな？」

「ん？うん、探してるけど…」

「ならば丁度よい！此方の武術の講師を探しておったのじゃ！」

「へー」

だからなに？

「えーと…だから…」

顔がが朱に染まる。ただでさえ真っ白な肌だから酷く目立つ。

「此方の講師につ…」

「良也く紙芝居できた」

「おのれ！小原小雪！どこまでも此方を邪魔するつもりかっ！？」

キレル不死川。

「ほえ？良也、これなに？」

これ、ときたか。

「不死川心、現代に生き残る雅な生き物だよ」

「ほーほー」

「何故かバカにされた気がする…」

「ほーほー」

「豚は？」

「ぶーぶー」

可愛いなあ…。

「おのれー！バカにしおってー！」

「まあ落ち着け不死川。ユキの紙芝居でも見て落ち着け。和むぞ？」

肩をつかんで隣の席に座らせる。

「……／／ふ、ふん！付き合ってやろう」

「よし、ユキ、始めてくれ」

「はい」

二人の前で紙芝居が始まる。

「昔々、ビルが立ち並び、ネットワークが張り巡らされた村がありました」

「明らかに昔じゃなからう!!」

「そこに、ある男がやってきました。

男は右も左も分からなかったのですが、村の人は男に優しくしてくれました」

ユキは淡々と物語を紡ぐ。

「『この株は買っておいた方がいいよ』『この壺を買えば幸せになれる』『お友達に紹介するだけで、お金が増えるんだよ』
村の人は、男に色々売ってくれました」

「……」

「そして時が立つにつれて、男が借りた家に、沢山の黒い服のお友達がくるようになりました」

「明らかにお友達じゃなからうっ!」

「お友達に海水浴に誘われた男は………おしまい」

終わった。

「続きが気になるのじゃー！ 気になるけど見たくないっ！」

「いやはや、今日はなかなか教訓になる紙芝居だったなあ」

まさに時世を感じさせる作品だった。

「…はあ…はあ…」

不死川、ツツコミ疲れか？

「なにか、心に痛い紙芝居じゃ…」

まあ回訓になる紙芝居だよなあ。

「不死川、落ち着いたか？」

「む、うむ。………というか此方は最初から落ち着いておるっ！」

そうかなあ？

「それで、ご用件は…：武術の講師とかなんとか言ってたけど」

「う、うむ。それなのじゃが…」

「おーい、良也、お客さん…」

「また貴様かぁー！！」

声をかけてきた山田の右脇に右手を滑り込ませ、左手で山田の右手の袖を掴む不死川。

おお！あの流れるような挙動！

自らの腰を相手の腰を乗せるように潜り込ませ…

スパーンッ！

お手本のような一本背負い。

「一本っ！」

思わずそう言った。

「何故…俺ばかり…」
カクリ…。

山田ってもしかなくても、ギャグ補正が凄まじく入ってるよな。

「むきー！何故こやつは此方の邪魔ばかり！」

地団駄を踏む不死川。

地団駄は雅じゃないなあ。

「あ、あわわわわ…なんだか大変な事に…」

ひょこつと扉から姿を現したのは

「まゆっちじゃない。ちよつとしたカオスだけどいらっしやい」

「あ、良也さん。すみません…ご相談があつて…」

あの遭遇からまゆっちから連絡はなかった。

俺自身が忙しかったのもあり、気に止めてはいなかったが…。

「どうかしたの？」

「はい…、実は…」

「ぐわー！ー！」

「ふぬー！ー！」

おお、腕挫腋固！

何故か山田が幸せそうなのが気になる。

気持ちは分からなくもないか。不死川って美人さんだし。

「そのう…、このメールを送ろうかと…」

「どれどれ…」

『夏の兆しが見え始め、新緑が栄える頃、如何お過ごしで…』

固っ！！つかビジネス文章！？

「…その友人は会社にお勤めなのかしら？」

「いえ、学生ですが…」

「まあ…個性だよね…」

全ては個性で片付くよね？

「個性…いい言葉です…」

「まゆっち、これは誤魔化されてねえかー」

松風！しゅっ！

ってか腹話術だよなあ。

たまに忘れる。

「きっとお友達もピッタリの返信をくれるさあ！」

「そうですか！ありがとうございます！」

まゆっちはそう言って嬉しそうに去っていった。

うむうむ、力になれたようにより。

「はあ…はあ…」

息を切らせた不死川と、グッタリした山田。

山田は何故かやりきった漢の顔をしていた。

合掌。

「不死川…。疲れている所悪いんだけど用件は…」

「う…うむ…。そうじゃった…」

不死川は多少もじもじした後に話し出す。

「今、此方の武術指導をしておった講師が持病の癪をこじらせて…」

持病の癪って本当にあるの？

「それで新たな講師を探しておるのじゃが、此方直々にお主を指名してやろうかと思ったのじゃ！末代まで語り継ぐとよい！」

へー。

「お主はバイトを探しておると聞いたしのう、それなりに賃金は弾むで、ど…どうじゃろうか？」

ふむふむ、またバイト候補か。

戦い絡みは変わらないがもしかしたら一番安全なのかも…。

「そかー。でも、すぐに解答はできないなあ…」

「こ、此方の誘いのじゃぞ！すぐに此方を選ばんとは不敬の極みじゃ！」

「いやいや、流石に職場はキチンと選ばなきゃならないし。単に遊びに行くなら両手をあげて行くけどねえ」

より平和そうな方向へ。

少しでも間違えると、あっという間に厄介事に巻き込まれるのは半生を通して知っている。

「な、ななななな！…遊びには来てくれるのか？」

「うん、なんだかんだでユキと遊んでくれてるし。俺としては不死川は友達と思ってたんだけど…」

ユキは忘れてるが。

不死川と（時には拳で）遊んでいる姿は兄としたら、とても微笑ましい。

ユキは友人が少ない。

できないと言うより興味が薄い。

だから不死川と掛け合っている時のユキは楽しそうに見えるのだ。

妹の友人は友人ということだ。

「ゆゆゆ友人…？」

「うん。まあ一方的にそう思ってるだけなんだけど…迷惑かな？」

「そそそそ、そうじゃな！高貴な不死川には、凡人の友人なぞ迷惑なだけ…」

まあ不死川ならそう言うわなあ。

乾いた笑いが浮かぶ。

「じゃが…此方は心が広いのじゃ。そなたくらいならば…許容してやらんでもない…」

おりよ？意外だな。

「そか。んじゃ末代まで語り継ぐよ。不死川心の友人だぜって」

「う…うむ。ほ…誇るがいい」

不死川はクルリと後ろを向きながらそう言った。

「で…では此方は行く、ゆっくり考えるといいのじゃ」

そう言い残し、さっさと教室を出て行く不死川。

選択の幅は広がったけど、なんかどれもこれも一癖ありそうだなあ。

とりあえず、お試しで回ってみようか…だがそれが一番危ない気が…。

しかし体験してみないことには…。

まあ…とりあえず帰るか。

人はそれを現実逃避と言う。

廊下は、だべっている生徒なんかが多々見られる。
何かと予定を立てているのだろう。

かくいう俺は金策を練っている事に若干悲しみを覚えつつ、下駄箱へ。

その道中に

「良也、今帰りか？」

「大和君。うん、そだよ」

両手に花状態の大和君発見。

片側が

椎名 京しいな みやこ

F組。風間ファミリー所属。風間ファミリー以外にはクールで素っ気ないが、風間ファミリーにはとても表情豊かに接する。どう考えても大和君の彼女。
んでもう片っぽが

クリステイアーネ・フリードリヒ (Christiane Friedrich)

最近、リユーベックから転校してきた人。転校初日に馬に乗って現れたある意味凄い人。情報が少ないなあ。

「大和、こちらの方が…」

「ああ、小原良也、噂の彼だよ」

噂？

「おお…！川神百代と数手とはいえ互角に渡り合ったという御方か！」

キラキラした目で見られる。

「あー、小原良也です。フリードリヒさんでしたよね、よろしくお
願い……ッ!？」

握手をしようと腕を差し出した時にどこから強烈な殺気。

条件反射で飛ぶ。

「? どうかしたか？」

疑問符を浮かべる大和君。

こんなリアルな殺気は随分と久しぶりだ。
こんな平和な学園で、戦場の匂い。
なんだってんだ？

「……いや、なんでもないよ。失礼しました、フリードリヒさん」

「いや…構わないが…」

フリードリヒさんも困惑した表情を浮かべる。

「……狙撃か」

ポツリと椎名さんが呟いたのが聞こえた。

椎名さんが目を向けた先に視線をやると、一瞬何かが光を反射した。

もしかして…スコープ？
いや、ここ日本だよ？

「椎名さん、目、いいんだね」

「別に…」

そう言ってプイツとそっぽを向く椎名さん。

そういや椎名さんは弓使うんだっけ。目が良くて当然だ。

「まあなんにせよ、よろしくね」

フリードリヒさんにそう告げる。

「うむ、よろしく頼む。この地には不慣れでな、知り合いは多いに越した事はない」

なんつーか、騎士みたいな人だなあ。一子さんとの決闘（転校初日）でレイピア使ってたし。西洋の騎士って感じ。

「ふむ…大和とは違い、良也の雰囲気は武士道に通ずるモノがあるな」

いきなり呼び捨てに面食らったが、その前の大和と違いって前置きが気になってたら…

「聞いてくれ！大和は姑息な策を弄するのだ！それは武士道に反するのではないか！？」

フリードリヒさんが何故かヒートアップし始める。

「いやあ、自分もSAMURAIではないですから…」

「しかし、良也は正面から戦うを良しとする心があるだろう?」

いやあ…むしろ背中向けて逃げ出したいです。

「ふむ…では、フリードリヒさんにとっての戦いとは?」

「正々堂々を良しとする!」

「では、奇襲、策を弄するは邪道?」

「無論だ」

ふむ…。戦争には向かない性格のようだ。

「フリードリヒさんはそれでいいと思いますよ。大和君は大和君、フリードリヒさんはフリードリヒさんです。考え方が違うのはお互いを高める良い関係になりますよ」

大和君は戦争向きで、フリードリヒさんは決闘向きなだけ

日本は平和だ。そんな考えでもいい。

敵を作りそうな性格だが、同時に味方も多い性格だろう。

「むう…しかし日本男児足る者…」

「色んな人がいるんですよ。せっかく日本に来たんですから、先入観なしで色々見知っておくのがいいですよ」

そう言って締めくくる。

どうやら、フリードリヒさんは間違った日本人象をもつ典型外人みたいだしなあ。

少しでも気に止めてくれりゃ僥倖くらいかな。

「それじゃ俺はこの辺で」

椎名さんのあっちいけ光線もあるので、別れを告げる。

何より、あまりここにいたくないのは見られてる感じがするから。

多分さっきの狙撃？の人だとは思いますが…。

何故狙撃なんかされにゃならんのかは知らんがな。

「大和、行こう？早くクリスの案内終わらせて…。私と…」

「お友達で。」

それじゃ、またな良也」

「あん…つれない…」

椎名さんと大和君は毎回こんな感じ。
椎名さんアタック↓大和君華麗にスルー。

これはすでに付き合ってるよなあ。

「はいはい、またね」

三人が連れ立って歩きだすのを見送る。

それと同時に監視者も俺から離れたようで、気配は感じられなくなる。

……恐らくフリードリヒさんについているのかな？

大和君と歩いていても、今までそんな事はなかった。椎名さんのさっきの様子からしても無関係だろう。

フリードリヒさんってもしかしたら凄い金持ちとか？

にしても、日本で狙撃とか…。

いいのだろうか…。

様々な疑問を抱えながら帰路を急ぐ。

一度家に帰り、決戦の準備をする。

「たっだいま」

持ち物を確認していると、俺がまゆっちと話しているうちにどっかにフラリと旅立ったユキが帰ってきた。

「ユキ…。俺は戦場に旅立つ…。俺がいない間、家は任せたぞ」

「うん！頑張ってTV見てる！」

頑張れ。

「それじゃあ…行ってきます」

「行ってらっしゃーい」

俺はエコバックをさげ、タイムセール戦場に旅立つ。

残金の余裕がなくなった今、食費においては一番削りやすい。

ちよつと小耳に挟んだ、激安スーパーという安直な名前の店。かなり遠い道のを経て、わざわざ此処まで来たわけですが…。

……只今、野菜コーナー、各種野菜バラ、一律10円、10円。

ギラッ

……どけええええ！

……おどれら！殺すぞ！

……ウオオオン！

予想以上の激戦に足が竦む。

こええ…これが…ジャパニーズSYU・HU？

日本の主婦は…強い。

だが俺にも帰りを待つ者がいる。

手ぶらでは帰れない！

……次は、精肉コーナー、豚肉、100g、なんと20円、20円。
。

ざわ……！

……どかんかい！ワレ！

……ヒヤッハー！今夜は焼き肉だあ！

ザザザと流れる人の波。

……見えた！

人垣を縫うように疾走する。

多分、デビルでバツなハリケーンとか使えた。

…退け！クソアマ！

ガキインツ！

…おどれがどけえ！

ネギで切り結ぶ主婦。

流石に先頭集団は気迫が違うぜ。

飛び交うじゃがいも。

飛来する鮭の切り身。

飛び散るトメイト。

数多の難関をかいぐり、俺の手は豚肉を…

バツ！

なにい！？

俺の指先が届く前に豚肉（300g60円）が別な奴にかすめ取られる。

「ふっ、もやしっこが良くやった…だが、ここまでだ」

この…気迫…他の主婦より一際強い存在感。

：『川神の夏侯惇』…。『松笠の呂布』と唯一戦えると噂される、
魔人…。

誰かが呟いた。

なん……だと!?

「ここ（タイムセール）はガキがくる所じゃないよ」

悠々と3パックを確保し、去っていく川神の夏侯惇。

…今回は…負け。

この戦場タイムセールにおいて、主婦は絶対的な存在。

如何なる力を持ってしても、退ける事はできない…（ギャグ補正と
同類）。

俺は、最後の100g20円を1パックつかみ取り、悔しさを噛み
締めた。

夕暮れの川沿いの道を歩く。

タイムセール以外でも、かなり安かった。
労力さえ考えなければ意外にいいなあ。

そしていつかあの主婦を超えてみせる。

p i r r r r r

ん？

着信…メールか。

ピッと中を確認。

あれ、まゆっちだ。

『夏の兆しが見え始め、新緑が栄える頃、如何お過ごしで…』

.....。

「俺宛てかああああ!!」

叫んでみた。

何故、俺宛を俺に相談したし。

そんな事を考えながら目を通す。

『.....今週の土曜日、外出など如何でしょうか...』

ん？これはお出かけのお誘い？

確か暇だよなあ。特にこれといって用事もないし。まあ大丈夫だろ。

「...おけ、大丈夫だよ...ん？」

『きっとお友達もピッタリの返信をくれるさあ!』

.....。

数時間前に俺が言った事を思い出した。

数時間前の俺：なんでハードル上げてんだよ…。

その後俺は律儀にもビジネス文章形式で返信した。

まあとりあえず、週末楽しみにしとこう。

軽くなった足取りで帰路を急ぐのだった。

真剣でアルバイト（後書き）

ちなみに川神の夏侯惇。これっきりになる可能性が高いです。
いや、ノリで書いてるんで忘れそうだなんですがね。

とりあえず、まゆっちフラグをジリジリ立てつつ、やっぱりまゆっちとクリスは風間ファミリー入りが妥当かなあ……。とか考えながら執筆中です。

なんか良く考えたら二人の加入時期的に時系列が若干歪んでいます
が華麗にスルーでお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1069m/>

俺out現実→俺in異世界 I F世界

2010年10月8日12時46分発行